

Title	現代アラム語概観(二) : 現代中部アラム語・現代マ ンダ語・現代西アラム語
Author(s)	高階, 美行
Citation	大阪外国語大学学報. 72(1) p.67-p.101
Issue Date	1986-11-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81109">https://hdl.handle.net/11094/81109</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 現代アラム語概観（二）：現代中部アラム語・現代マンダ語・現代西アラム語

高 階 美 行

A State-of-the-Art Study on Modern Aramaic(Ⅱ)

——Modern Central Aramaic, Modern Mandaic, Modern West Aramaic

Yoshiyuki TAKASHINA

The following constitutes the latter part of my study in Modern Aramaic, of which the first part (Modern East Aramaic) has appeared in this journal (vol. 71-1, 1986). Of the four main Modern Aramaic languages, this part devotes itself to the Modern Central Aramaic (Ṭuroyo), Modern Mandaic and Modern West Aramaic (Ma'lula). As a continuation that completes the first part, the present article employs the same grammatical framework and terms with the purpose in mind to show more clearly how each Modern Aramaic chose and developed one of the diverse possibilities of its predecessor language, not necessarily to be conceived as one of the Late Aramaic. Thus paragraph numbers continue the first part and the reader is requested to refer to the corresponding paragraph of Modern East Aramaic where relevant information is given.

本稿は、先に発表した現代アラム語概観のまとめ（学報第71-1号所収）で扱えなかった残りの三大方言群、即ち、現代中部アラム語・現代マンダ語・現代西アラム語を取り上げる。これらの現代アラム語に関して知られている事実をまとめて、再評価したり新しい解釈を行う仕事の必要性和動機は、前稿の冒頭に記したとおりである。それ故本稿での記述の態度と視点は前稿と一体のものであり、各アラム語固有の歴史や地位によりやむをえない場合を除き、記述の順序も前稿の現代東アラム語のそれに従う。特に言語概要の部分は、後期アラム語からの発展という歴史的立場と現代語としての総合的角度から比較するために、同一の術語を一貫して使用している。これにより、各アラム語がアラム語として持つ多様な可能性をいかに選択し、どのように変容させたかが判明するであろう。従って本稿中の文法術語と略号に関しては、前稿の現代東アラム語の対応する項目を参照されたい。

尚, ここに前稿で漏れた次の文献を記す。これは現代アラム語全般とその話者に関するほぼ完全な文献目録で, 主要出版物には短いコメントが与えられている。この編纂目的は本稿執筆の動機と同一であり, きわめて有用なものである。

Poizat(1982), B.; Une bibliographie commentée pour le néo-araméen, *Comptes rendus du group linguistique d'études chamito-sémitiques*, tomes XVIII-XXIII (années 1973-1979), pp. 347-414

### 3. 0. 現代中部アラム語(MCA)

3. 1. 言語名 現代中部アラム語 Modern Central Aramaic (MCA)は, トルコ南東部トゥール・アブディーン Tūr 'Abdīn地方のマルディン市にあるミドヤト Midyat の町を中心とする45村落において, 東方教会単性論ヤコブ派 Monophysite Jacobites により母語として使用される現代アラム語方言群の総称である。トゥール・アブディーン地方のアラビア語形容詞 Ṭōrānī により言語名トゥラーニー語とされていたが, MCA の形容詞形 Ṭuroyo によるトゥーローヨー語が最近用いられる。自らをシリア人と呼ぶので, 自称はシリア語 siryoyo。又, トゥール・アブディーンの新アラム語 Neuarāmāisch des Tur 'Abdin と呼ばれるが, 古典シリア語 Classical Syriac (CS)に非常に近い(後述)ことを考慮すれば, パリゾ M.D.J. Parisot が MCA に用いたが, 現代東アラム語 Modern East Aramaic (MEA)に誤って定着した「新シリア語」Neo-Syriac はこの MCA に用いられるべきであった。単にシリア文字を用いるという事実が, MEAにその名をつけさせる一因となった。

おそらくキリスト教受容以前から, 話し言葉としてアラム語を用いていたと思われるが, 彼らの教会用語即ち文語は CS であった。ヤコブ派の CS は, 東部のネストリウス派 Nestorians の CS 東方言と次の点で異なり CS 西方言と称される。

	使用 者	文 字	母音表記	*ā	*ē	*ō	*[h]
CS東方言	ネストリウス派	(古いエストラングラーに近い)ネストリアン	文字上下の母音点	ā	ē	ō	x
CS西方言	ヤコブ派 マロン派	セルトー	ギリシア母音字起源	ō	ī	ū	ḥ

(註: マロン派は7.3. 項を見よ, セルトー serṭō 「ひっかき跡」)

#### 古典シリア語の方言差

以下に比較の対象として引用する CS は, 西方言の形式である。

3. 2. 歴 史 451年カルケドン公会議で異端とされた単性論派(キリストの人性は神性に吸収されるとの立場)は, 542年エデッサの府主教となったヤコブ・バラダイオス Jacob Baradaeus によりアラビアなど各地に広まった。この教えに従う人々をヤコブ派と称するが, 彼らもイスラムの興隆に敗退しエデッサ(現トルコのウルファ)に近いクルディスタン西部の山岳地帯に逼塞して現

代を迎えた。これに先立ち、1781年苦境の中でローマ・カトリックの権威を認めざるを得なかったアレppoのミカエルが新しい合同派教会の総主教座をレバノンに移したことにより、ヤコブ派教会は正統シリア人 Orthodox Syrians と合同教会派西シリア人 West Syrian Uniat に分裂した。

3. 3. 方言分布・話者数 第一次大戦による不安定な政治情勢の下でクルド人による迫害のため、1915年多数がシリア・レバノンに移り、1927年には大挙してシリア側のカミシュリ Kamışli (アラブ名 El-Qamishliye)に脱出した。これ以降シリア・ヨルダン・レバノン・イラク等への移住が続き、アメリカや南インド(宗教上の同胞がいる)にも多数存在する。かくして現在では宗教・言語・場所が分離して、話者の正確な数字を把握することができない。ヘルムート・リッター H. Ritter によれば、1960年・1966年の情報でトルコ国内の話者数は19,356人と計算されている。

3. 4. 研究史 ヤコブ派は西欧の宣教師団の積極的活動の対象とならなかったため、ついに自らの言語を文字化することがなかった。また研究者も MEA ほどには強い関心を示さず、言語的研究も少ない。プリム E. Prym とゾチン A. Socin による発見とテキスト採録(1869年)からその刊行(1881)までに時間を要した。フランスのシリア調査団の一員パリゾが、現代西アラム語 Modern West Aramaic (MWA)の調査の一方で MCA の基本的文法を調べそのスケッチを発表した(1897)。ネルデケ Th. Nöldeke が前者のテキストに対する書評論文(1881)で MCA は CS 西方言を来源とすると明言し、その後の研究を方向づけた。ジーゲル A. Siegel の前者のテキストに基づく文法(1923)は、記述的でないとは言え、今なお有用である。しかし、ジーゲルのみならず研究者を当惑させたのは、プリムとゾチンのテキストが精密表記にすぎるとともにしばしば不統一であり、さらに、パリゾの報告する形式とも矛盾することであった。こうして長期にわたり信頼ある情報を欠いたままであったが、一次大戦の頃より関心を抱いていたリッターが6村落の方言を調査し膨大なテキストを刊行した(1967-71)こと、及び彼の弟子オットー・ヤストローヴ O. Jastrow がミディン村 Midin 方言の音韻表記による記述文法を著した(1967)ことにより、やっと MCA の全体像が正確に把握できるようになった。リッターは第2部文法、第3部辞書を刊行する予定であったが71年他界し、辞書が第2部として遺稿のファクシミリの形で出版された(1979)のみである。

3. 5. 言語作品 CS 西方言のシリア文字セルトーを知っていたのに、それを用いて自分たちの口語を表記することはなかった。1.6. 項で述べたザハウ E. Sachau が集めた写本の中には、アラビア語から MCA に翻訳されたものがある。19世紀のもので古くはないが、これがおそらくシリア文字セルトーにより表記された MCA の唯一のテキストである。その他はすべて村の歴史・宗教上の偉人の伝説・民話のたぐいで、西欧の研究者により収集されローマ字表記されたものである。尚、1983年にスウェーデンに住む MCA の話者により作られた民族教育会議が同地の子弟に対する民族語教育のために教科書を出版した(Toxu Qorena 'Come, let's read' 84p.). ラテン文字に改変記号をつけたアルファベットで表記法、発音を教えやすい読み物をのせている。今後定着するか不明だが、彼らの長い歴史の中で画期的なことである。

3. 6. 下位方言 リッターの多くの方言テキストや本稿筆者のムズィーザハ Mzizah 村方言研究

(1980)により、MCAは決して均質な言語でなく村落毎の差を伴った方言群であることが判明した。しかし、それは一方の変異体を他方で主として用いる（人称代名詞接尾形1人称複数 *ayna~an* など）とか、語彙でどの借用語を用いるかという程度であり、MEAの四つの下位方言の差（しばしば相互理解が困難）に比べれば、MCAのそれは小さいと言える。

3. 7. **MCAの位置付け** 後述の言語概要に見るとおり、それ自身後期アラム語であるCS西方言を来源とすることは疑いも無い。従ってMEAに特徴的な複合時制を持たないが、有声閉鎖音の保存・完了相（他動詞）の形式・CS完了形／未完了形の消失などにおいて、MEAとともに広義の現代東アラム語に属すると言える。しかしMCAは、(1)音素目録、(2)2人称代名詞 *h-*、(3) *ā > ō* の変化、(4)定冠詞の存在、(5)コプラによる間接活用と  $\sqrt{h-w-y}$  ‘to be’ による複合時制の欠如、(6)CS基本型Pealの動詞形容詞 *qatṭil* の完了相（状態動詞）への転用など重要な点において、後期西アラム語の発展形であるMWAと共通することを無視しえない。かくして予想以上にMEAのウルミー方言(U)からかけ離れたMCAは、むしろCSにより近い点でMEAの南方言を通してMEAとつながり、前述の六項目でMWAに接近するのである。このようにMCAの、地理的のみならず言語的な中部方言としての地位は、広義の現代東アラム語に属するという事実の前で等閑にされてはならない。

3. 8. **辞書** 唯一の辞書は、リッターによるタイプ原稿のファクシミリである。

Ritter(1979), R.; Tūrōyo. Die Volkssprache der syrischen Christen des Tūr ‘Abdīn. B: Wörterbuch (Das Autorenmanuskript zum Druck in Faksimile gebracht von Rudolf Sellheim), Beirut -Wiesbaden

これは彼自身のテキスト三巻の訳を作る際に作製した未定稿であり、書き込み・削除も多く略号の説明もないので利用には十分な慎重さが必要である。また、プリムとゾチンがテキスト1巻を翻訳する際にもカードを作っていたはずであるが、その行方は知れない。こうした状況下では、リッターの辞書を中心としつつ、音韻対応の知識によりCSの辞書を参照し、トルコ語・クルド語・アラビア語の文語と方言の辞書類で補うより仕方ない。

3. 9. **主要研究書** MEAに比べれば、数は少ない。以下の他に、テキスト二篇・書評二篇あるのみである。

Blau(1968), J. ; review of Ritter(1967-71) Bd. I and Jastrow(1967), *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 31, pp. 605-610

Ishaq(1983), Y.; Toxu Qorena, Stockholm

Jastrow(1985), O.; Laut- und Formenlehre des neuaramäischen Dialekts von Miḡin im Tūr ‘Abdin, (1. Aufl., 1967, Bamberg) 3., ergänzte Aufl. Wiesbaden

Nöldeke(1881), Th. ; Buchbesprechung des Prym-Socin (1881), *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. 35, S.218-235

Parisot(1897), M.D.J.; Contribution à l'étude du dialecte néo-syriaque du Tour-Abdīn, *Actes*

- du XI<sup>me</sup> congrès international des Orientalistes, IV:section sémitique*, Paris, pp.179-198
- Prym, E.-Socin, A.(1881) ; Der neu-aramäische Dialekt des Ṭūr 'Abdīn, 1. Teil: Die Texte, 2. Teil: Übersetzung, Göttingen
- Ritter(1967-71), H.; Ṭūrōyo. Die Volkssprache der syrischen Christen des Ṭūr 'Abdīn. A: Texte, Bd. I(1967), Bd. II(1969), Bd. III(1971), Beirut -Wiesbaden
- do. (1967); Ṭūrōyo(Ṭōrānī), in *An Aramaic Handbook ed. by F. Rosenthal* (1967, Wiesbaden), Part II/1 pp. 78-81 (text) & Part II/2 pp. 112-120 (glossary)
- Siegel(1923), A. ; Laut- und Formenlehre des neuaramäischen Dialekts des Ṭūr Abdīn, (*Beiträge zur semitischen Philologie und Linguistik herausgegeben von G. Bergsträsser, Heft 2*), Hannover, repr. Hildesheim, 1968
- 高階美行(1980); 「現代アラム語 Ṭuroyo 方言の接尾人称代名詞」, 『オリエント』第23巻第1号, pp. 45-63

#### 4. 0. MCA の言語概要

記述するのはヤストローヴによるミディン村方言であるが、音韻表記を変更した箇所がある。

4. 1. 音韻論 母音の後での bgdkpt の摩擦音化は既に機能せず、MCAはこの規則が働いていた頃の音形を反映しているにすぎない。即ち、破裂音としては \*p > f を除き保存され、摩擦音としても次表のように非常に良く保存されて CS の音形を再現している。' や ' も残している。強勢は語末から第2音節にある。

CS	b[v]	g[ɣ]	d[ð]	k[x]	p[f]	t[θ]
MCA	w	g[ɣ]	d	x	f	t

4. 2. 人称代名詞独立形 3人称 *m.hū, f.hī* を失い, *hī*+接尾形 *B<sub>1</sub>* (4.3. 項) *m.-e, f.-a* による新形式が生まれた: *hiye, hiya*. 2人称の *h-* や *1.sg. 'ono* < *'enō*, *1.pl. 'aḥna* (2.2.1. 項を見よ) は注目に価する。2人称単数のみならず複数でも、名詞と同様に、性の区別を捨てている。ミドヤトでは *huwe* 'he' と *hiye* 'she' の古い対立を残している。

	sg.	pl.
3	hiye(m)    hiya(f)	hīnne~hīnnuk
2	hat	hātu
1	'ono	'aḥna

代名詞独立形

4. 3. 人称代名詞接尾形 (Uの接尾形Bに対応) 3.sg.に  $-e(m)/-a(f)$  を持ち古い  $-eh/**\bar{a}h$  である点で MEA の南方言に近い (伝統的 CS 西方言の発音では  $-\bar{o}h > o$ ; このように文法語彙の中には、明らかに CS 西方言の  $\bar{o}$  でなく  $\bar{a}$  に遡るものがあり、それらには  $**$  を付す)。1.pl.an には方言形  $-ayna$  (cf. U-enij)がある。又、3・2 pl.は使用される語彙と共に常に固有の形態音韻的变化を示すが、名詞では名詞複数  $cst. st.$ の  $-ay$  が現われる： $-ayye$  ‘their’  $< -ay + e$  ‘his’,  $-ayxu$  ‘your,pl.’。

	sg.m.	sg.f.	pl.
3	e	a	(ay-y-)e
2	ox	ax	(ay-)xu
1	i		an

接尾形 B<sub>1</sub>

名詞に直接接尾するこれらの形式を接尾形 B<sub>1</sub> とすれば、新しい接尾形 B<sub>2</sub> ( $-\text{ayd} + B_1$ )の方が支配的となっている。B<sub>1</sub> は親族名詞及び身体部分や人間と密接に関連する名詞など、ミディン村方言で86語、ムズィーザハ村方言で72語にのみ使用される。前者で B<sub>1</sub> は B<sub>2</sub> と自由変異体の関係にあるが、後者では B<sub>1</sub> を取る名詞は B<sub>2</sub> を取らず相補分布をなしている。更に後者の親族名詞28語は3人称の接尾形を取らず、定冠詞で代用するという特異な現象を示す。ヤストローヴは B<sub>2</sub> の起源を名詞語尾  $-o + \text{did-}$  と考えるが、賛成しない： $'u(\text{the}) \text{ bayto}(\text{house}) \text{ did}(\text{of}) \text{ e}(\text{his}) > 'u\text{-bayt-ayd-e}$  ‘his house’。むしろ CS で複数名詞+接尾形 B の時現われる  $cst. st.$ の語尾  $-ay$  に、関係詞  $d +$  接尾形 B<sub>1</sub> が加わったものである。複数名詞の形式の一般化は後期東アラム語のバビロニア・アラム語や古典マンダ語にも見られるし、関係詞  $d +$  接尾形 B は現代マンダ語で借用語に対して用いられる形式に対応する (6.8. 項参照)。尚、動詞の目的語は、基本的に前置詞  $l-$  ‘to, for’ + 接尾形 B<sub>1</sub> が表現する。

4. 4. 独立所有代名詞  $\text{did} +$  接尾形 B<sub>1</sub> ( $\text{did-e}$  ‘彼のもの’等) は、接尾形 B<sub>2</sub> の誕生のため、所有形容詞のように名詞と共に用いられることはない。

4. 5. 指示代名詞 単数近指示詞は CS の発展形であるが、複数  $\bar{h}\bar{a}n\bar{i}$  は CS  $**\bar{h}\bar{a}n\bar{e}n$  ‘those(f)’ に由来する (U enij を見よ、2.2.7. 項)。複数遠指示詞  $\bar{h}\bar{a}n\bar{u}k$  は稀な CS の形  $**\bar{h}\bar{a}n\bar{u}k$  を想起させるが、 $-k$  が閉鎖音であるから二次的かも知れない。この  $-uk$  は CS  $haw, \bar{h}\bar{a}y$  にも拡大した後、自由交替形として  $-k$  が脱落する。指示形容詞としては、定冠詞と共に起し  $h-$  を脱落させた後、名詞に後置される： $'u\text{-malk-}\bar{a}n\bar{o}$  ‘this king’。

	sg.m.	sg.f.	pl.
this	$\bar{h}\bar{a}n\bar{o}$	$\bar{h}\bar{a}t\bar{e}$	$\bar{h}\bar{a}n\bar{i}$
that	$\bar{h}\bar{a}w\bar{o}(k)$	$\bar{h}\bar{a}y\bar{o}(k)$	$\bar{h}\bar{a}n\bar{u}k$

指示代名詞

4. 6. 疑問詞 *mīn* は他の方言形 *mūne* ~ *mū* があるので CS *mūn* < *mōn*(ō) に由来することは明白である。'áy-darbo = 'ay (セム語疑問詞要素) + アラビア語 *darb* 'way', 'in what way > how'。kmo は少数を, muqqa は多数を質問する。muqqa < *mīn-qāṣ* (= アラビア語 *qiyās* 'measure') 'what quantity > how many'。qay = \*qā + 'ay は疑いの余地がない。MEA *qə-mu*, *qə-mudij*; MM *qā-mū* に造語法で共通するとともに, MCA にも痕跡的に \*qā 'for, to' が存在することは興味深い。その他は CS に単純に遡る。ただし 'ayna (CS\*\*'aynā) と 'ayko (CS 'aykō) を比較せよ。

何	誰	どれ	いかに	どこ	いつ	どれだけ	なぜ	疑問詞
<i>mīn</i>	<i>man</i>	'ayna	'áydarbo	'ayko	'ēma	kmo, muqqa	qay	

4. 7. 関係詞 *d-* は CS の統語的用法をそのまま引継いでいる。

4. 8. コプラ 人称代名詞独立形の前接形に基づく接尾形 *A<sub>1</sub>* (U の接尾形 A 2.2.2. 項を見よ) は, コプラとして一般化した。3.sg. には性の区別がなく -yo < CS *hū* 'he': *zlām nuxroyo-yo* 'he is a foreigner'。このコプラ過去形のうち 3・2.sg., 2.pl. は CS の完了形の唯一の残滓であり, 他の活用形も現在形への類推の上に成立したと推定される: CS\*\**hāwā*, *hāwayt*, *hāwaytūn* (√*h-w-y* 'to be')。又, CS のコプラ 'it + 接尾形 B は, 'it に動詞の現在時相表示詞 *|ko|* がついて *kit* + 接尾形 *A<sub>1</sub>* の形で, 接尾形 *A<sub>1</sub>* と同様にコプラとして機能する: *kit-yo*, *kit-wa* 3.sg; *kit-hit*, *kit-wayt* 2.sg,m 等。否定は *lat* + 接尾形 *A<sub>1</sub>*。

	現 在		過 去		
	sg.	pl.	sg.	pl.	
3	vo	ne	wa	way-ne	接尾形 A <sub>1</sub>
2	hit(m) hat(f)	hatu	way-t	way-tu	
1	no	na	way-no	way-na	

4. 9. 名 詞 CS の *det. st.* が一般化し, 名詞の位相は消失した。単数で男性の名詞は複数で -e, 同じく女性の名詞は -ōte (\*-ōto から男性語尾 -e の一般化) を取るが, 複数では性の区別がない。従って名詞語尾変化は *m.sg.* -o, *f.sg.* -to, *pl.* -e / -ōte。形容詞は *brim-o m.sg.* 'round', *brim-to f.sg.*, *brim-e pl.*。これは U と全く同一の結果である。限定 / 不定は定冠詞 *m.sg.* 'u-, *f.sg.* 'i-, *pl.* 'aC-, 及び不定冠詞 *m.sg.* ḥa, *f.sg.* ḥdō, *pl.* φ により示される。これは CS で名詞・代名詞の前に置かれた 3 人称代名詞独立形 (*m.sg.* *hū*, *f.sg.* *hī*, *pl.* *hen(n)ūn*) が指示詞的に用いられた事実に由来する (ネルデケ, 1898, §227; 1.15. 項参照)。属格構造は, *cst. st.* の消失のため, 関係詞 *d* により示される (2.3.1. 項で言及した属格構造(2)に相当): 'u-bayto *d-*



u-babo ‘the house of the father’。もし名詞 *nomen regens* が代名詞接尾形  $B_1$  をとるものであれば、属格構造 (3) が現われる：bayt-e (his house) d-u-babo > ‘the house of the father’。しかし *nomen regens* が取る -e (<CS -eh ‘his’)) は、*nomen rectum* の性に無関係で常に -e である点で、これは既に痕跡的表現である。だが痕跡的とは言え、属格構造 (3) が残ることも MWA と共通し、興味深い (8.9. 項参照)。

#### 4. 10. 動詞のアスペクト・時制

	現 在		過 去
未完了相	$\left\{ \begin{array}{l} ko \\ gid \\ \phi \end{array} \right\} -fotiḥ -A_2$		fotiḥ-A <sub>2</sub> -wa
完了相	行為動詞	ftiḥ-le (C)	ftiḥ-way-le(C)
	状態動詞	dāmix-A <sub>2</sub>	dāmix -A <sub>2</sub> -wa

$\sqrt{f-t-ḥ}$  ‘to open’ (= U  $\sqrt{p-t-x}$ ) を動詞語根とすれば、未完了相語幹 *fotiḥ* は U の *pētix* と同様 CS *a.p.* *pōteh* に由来する。活用語尾は、コプラとして使用される代名詞接尾形  $A_1$  とは、*a.p.* の語尾母音との形態音韻的変化の結果少し異なる接尾形  $A_2$  である。

	sg.m.	sg.f.	pl.
3	fotiḥ- $\phi$	fith-o	fith-i
2	fith-it	fith-at	fith-utu
1	fotaḥ-no	fith-o-no	fith-i-na

接尾形  $A_2$

完了相語幹 *ftiḥ* は U の *ptix* と同様 CS *p.p.* *pētix* に遡り、活用形式も前置詞 *l-* + 接尾形  $B_1$  (= 接尾形 C, 2.2.4. 項) である。但し状態動詞 *dāmix* ( $\sqrt{d-m-x}$  ‘to sleep’) は、CS の動詞形容詞 *qattilō* に基づき、活用も  $A_2$  による。この点は活用形式は別として MWA の状態動詞結果相と共通し (8.11. 項), MEA に対応物を見出せない。MCA の大きな特徴と言える。過去時相表示詞 *wa* (<\*\*hāwā, U *vā*) は、1 人称で -wa- $A_2$  の順になる (sg. -wayno, pl. -wayna) が、これはコプラ = 接尾形  $A_1$  の過去形への類推である。他の時相表示詞  $\{ko\}$  は現在,  $\{gid\}$  は未来,  $\{\phi\}$  は接続法を示す。*ko* は U *ki* と来源を同じくする。ネルデケ (Mandäische Grammatik, Halle, 1875, § 261, p. 379) によれば、13 世紀のシリア語作家バル・ヘブラエオス Bar Hebraeus は *kā* + *a.p.* を誤って東シリア人が用いると述べている。この *kā* は *qā'em* > *qā'e* > *qā* に相違なく、音韻的にそのまま *ko* に対応する。*gid* の説得的説明は、今まで提出されていない。*ko* は状態動詞完了

相現在に接頭されて、Uの結果相に似た意味を持つが頻度は高くないようである：ko-dāmīx-φ ‘he has slept>he is asleep’。以上見るように、MCAは助動詞を用いることなく、すべて直接活用単純時制であるが、複合時制に似たものとして、 $\sqrt{h-w-y}$  ‘to be’ (U  $\sqrt{h-v-y}$ )の未来+完了相が未来完了を表わす：t-(h)owe-φ moqaḏ-le bayto ‘it will have burnt down a house’ (t- =gid)。但しこの組み合わせはUにみられないものである。

#### 4. 11. 動詞派生型

派生型 態 アспект	I (Peal, U I)		II (Pael, U II <sub>1</sub> )		III (Aphel, U II <sub>2</sub> )	
	active	passive	active	passive	active	passive
未完了相 Impf.	fotiḥ -A <sub>2</sub>	miftiḥ-A <sub>2</sub>	mḥālīq -A <sub>2</sub>	miḥālīq-A <sub>2</sub>	manšīf-A <sub>2</sub>	mitanšīf-A <sub>2</sub>
完了相 Perf.	ftiḥ-C/dāmīx -A <sub>2</sub>	ftiḥ-A <sub>2</sub>	mḥalaq-C	mḥālīq-A <sub>2</sub>	manšaf-C	mtanšīf-A <sub>2</sub>
命令形 Impt.	ftaḥ	miftaḥ	mḥalaq	miḥalaq	manšaf	————
不定詞 Inf.	ftoḥo	————	ḥeloqo	————	tanšofo	————
受動分詞 p.p.	ftiḥo/damixo	————	mḥalqo	————	manšfo	————
意 味	to open / sleep	to be opened	to throw	to be thrown, fall	to make dry	to become dry

CSの派生型がかなりきれいに残っており、能動態未完了相はCSの*a.p.*、同完了相はCSの*p.p.*を用いている。受動態では未完了相がCSの再帰型分詞 (*a.p.* / *p.p.*の区別なし)、完了相が、対応するCS能動態の*p.p.*を用いている。IIの能動態未完了相と受動態完了相が、音韻変化の結果中和していることに注意。また、IIIの受動態二形式はIIのそれらに類推の結果母音が同じになっている。CS再帰型の接頭辞‘et-’の-tが、I・IIにおいて第1語根への同化が原因で消失（バビロニア・アラム語に同じ）しているのは興味深い：metpēteh>\*mippētiḥ>\*miptiḥ>miftiḥ。受動態の活用形式は完了相も未完了相もA<sub>2</sub>であり、基本型Iの状態動詞と共通している。命令形は基本型Iを除き、Uと同じく未完了相語幹 (=CS *a.p.*)を用いるが、MCAではIの命令形語幹母音-a-に影響されて、表面的にCSの*p.p.*に対応するように見える。不定詞は、CSの不定詞 (meqṭal 等) でなく行為名詞 nomen actionis に由来する：I qētōlō, II quṭṭōlō, III taqṭōlō。III taqṭōlōは、CSでもまだAphelの行為名詞として定着していなかったことを想起されたい。未完了相語幹となったCS *a.p.*の代わりに、Uのように新しい*a.p.*が生まれなかった。ただ一部の動詞にCSの行為者名詞 nomen agentis の形式qattōlōに由来する、gaḥoko ‘laughing’などが形容詞としてあるのみである。

以上から要するに、不定詞・分詞・受動態にかなり忠実なCSの形式が再現されていることは、同じ後期アラム語でもCSとかなり異なったバビロニア・アラム語や古典マンダ語に近い、MEAとの相違を決定的にするものであり、MCAの起源を強く示唆している。

## 5. 0. 現代マンダ語(MM)

以下の記述では、古典マンダ語正書法の翻字は、慣行に従いゴチック体で示す。

5. 1. 言語名 世界の真の知識 **manda** (=ギリシア語 *gnōsis*) を中心とするマンダ教 Mandaism を信ずるマンダ人 Mandaean (自称 **mandaia** [ˈmandaːja]) が用いる現代アラム語を現代マンダ語 Modern Mandaic (MM) と称する。この社会では聖職者 **naṣuraiia** [-raːjiː] ‘(教えを) 守る入々’ に対して平信徒を **mandaiia** [-daːjiː] ‘マンダ人たち’ と呼び、西欧に知られている宗教写本は聖職者の言語で書かれているのであるから、写本の言語は「ナソラ語」Naṣōraean であるべきで、平信徒の用いる現代アラム語こそ「マンダ語」Mandaean/Mandaic と呼ばれるべきであった。しかし、1953年ルドルフ・マツーフ R. Macuch がイランのアハワーズで MM を話すマンダ人を発見するまで、彼らの生きた現代アラム語に無知で写本の言語のみしか知らなかった西欧の研究者は、後者をマンダ語と名付けていた。前者を「現代マンダ語」と呼ぶゆえんである。MM の自称はマンダ語 *mandāyī*。

5. 2. 系 統 古典シリア語 Classical Syriac (CS) やバビロニア・アラム語 Babylonian Aramaic (BA) とともに後期東アラム語に属する古典マンダ語 Classical Mandaic (CM) の、かなり忠実な発展形である現代マンダ語では、現代東アラム語 Modern East Aramaic (MEA) や現代西アラム語 Modern West Aramaic (MWA) とは異なり、来源究明は大きな問題とならない。これは全歴史を通じて少数派であった彼らの社会が他宗教による迫害により常に閉じたものであったため、言語成立後他のアラム語と接触することが少なかったことによる。

5. 3. 文 字 写本の言語である CM は、マンダ文字を使用する。この文字は、例は少ないが MM の表記にも使用される。マンダ文字は、アラブのナバタイ部族が北アラビアで用いたアラム文字の発展形であるナバタイ文字 Nabataean script の影響を受けたアラム文字の一種で、2世紀頃から現在まで使用され続けている。この文字は母音記号を持たないが、BA 以上に母音表記に熱心で *halqa* (=CS *Alaph* /ʾ/)・*ū-šenna* (=Waw /w/)・*aksa* (=Yodh /y/) のいわゆる「読みの母」*matres lectionis* を多用する完全表記 *scriptio plena* であることが大きな特色である。なお、語尾 **-ia** = [-iː] に注意のこと。マンダ文字で MM を表記すれば、日常言語のアラビア語・ペルシア語のスペルに影響されて母音のない不完全表記 *scriptio defectiva* で、しかも子音を混同するため理解は容易でない。後述するド・モルガン de Morgan のテキストはこうした貧弱な状態を示している。

5. 4. 分布域・話者数 マンダ人は今日、イラクのチグリス・ユーフラテス下流で運河の多い湿地帯や、イランのカルン川流域フゼスタン州アハワーズとホラムシャハル（上流のシュシュタルより迫害のため移住）に住む。一部は都市にも進出している。主として金・銀細工や小舟作りに従事しているが、現在両地域合わせて15,000人（1962年イラクで11,825人）くらいと見積もられている。MM を用いるのはイラン側マンダ人のみであるが、その実数は不明である。両地域とも宗教

言語である CM は聖職者と一部の知識人しか理解せず、イラクの平信徒はアラビア語しか理解しない。イランの平信徒は、MM・アラビア語・ペルシア語を使用する。MM の話者数がごく限られたもので死滅が懸念されている現在、イラン・イラク戦争による彼らの運命への影響が心配される。

5. 5. 歴 史 この言語の性格を理解するためには彼らの歴史を知る必要があるが、自らの歴史書を持たないので詳細は長く不明のままであった。最近クルト・ルドルフ K. Rudolph らの研究(1960-61, 1978)によりやっと判明に近づいたところである。紀元直前の頃、霊知 gnos̄is を根本思想とするグノーシス主義 gnosticism に関心を抱くユダヤ教下層聖職者や知恵の教師らは、(特にヨルダン川での)洗礼を重視する動きに深く関係していた。正統的ユダヤ教より、ユダヤの対ローマ反乱(後1-2世紀)の頃圧迫を受けた結果、まずハッラーン Harrān (古名 Carrhae, シリアに近いトルコの町)に逃れ、更にパルチア王アルタバン Artaban III (又は IV/V) 治下のメディア地方 Media の山岳地帯(カスピ海南西部、ほぼクルディスタン東部)に移った。そこからメソポタミア下流域(古代のメセネ Mesene・カラケネ Charakene など)に広がっていった。この頃の初期マンダ教と接触し相互に影響しあったのがマニ教 Manichaeism の開祖マニ Mani/Manichaeus (276年頃没)である。かくして両大河下流のバビロニアに進出した後、新しい環境の下で伝承も変容し、ヨルダン川もユーフラテス川に置き替えられた。以降、ササン朝・イスラム期を通して、イスラム教・キリスト教・ユダヤ教からの長い圧迫の歴史を経て現在に至っている。洗礼者ヨハネは敵対者キリストとの対比で真実の預言者とされているだけであるし、洗礼もキリスト以前の伝統を受け継いだものであるから、マンダ教はキリスト教と何の関係もない。むしろ教えの中核はグノーシス的二分法である。光の世界と闇の世界、魂とそれを閉じてめる肉体という二重の二分法は、知識 **manda** により魂が救済され光の世界へ入るという形で関連する。

5. 6. 言語史 以上の歴史を理解すれば、パレスチナ(後期西アラム語の領域)脱出以前の、彼らの日常アラム語の中に非東アラム語的要素が存在したわけだから、後期東アラム語である CM の中に西アラム語的・クムラン(非正統ユダヤ教団)的要素が残存していても不思議ではない：**manda** (CM/MM) ‘knowledge’, **gupna** (CM)/**gufnā** (MM) ‘vine’, **kušta** (CM) ‘truth’ に対して CS は **maddē‘ā**, **gēfettā**, **quštā** である。また紀元前に遡る閉鎖的民族の言語として、公用アラム語 Official Aramaic (前700-前300/200) の要素を残していることも当然の事実である。例えば、(\***dahbā**>) **zahba** ‘gold’ と新しい **dahba** の共存、\***ḏ**>**q** (= [ɣ] ?、古代アラム語・公用アラム語) > ‘ の変化で **arqa** [ara] ‘earth’ の中に **q** が残っていることなど。だが、バビロニア進出後その主要言語たる後期東アラム語を用いるようになったことは、写本の言語である CM が、以前よりそこにいたユダヤ人の BA と多くの共通点を持つことにより疑いの余地がない。更にこれを裏付けるのが、呪詛文書 incantation texts である。マンダ文字・ヘブライ文字(BA)・シリア文字(CS)でササン朝期(下限600年頃)に書かれたこれらのテキストは、宗教的背景は異っていても正統的宗教文書でない点でそれぞれの文語的規範からはずれており、多くの言語特徴を共有

する。写本に日付を明記せぬこと、後世の追加の自由な挿入などのせいで年代特定は困難であるが、次のように区別される。

(1) 古典マンダ語——3世紀からイスラム暦1世紀=7世紀

(2) 後期古典マンダ語 Postclassical Mandaic——CM を模倣するがアラビア語語彙が混入

(3) 現代マンダ語——近現代の写本の奥付や手紙など少数の世俗的書き物、及び日常の話し言葉

5. 7. **MM の位置付け** 既述のとおり MM は、後期東アラム語の CM の発展形である。従って MM は広義の現代東アラム語に属する。但し CM/MM の中に、民族発生の経緯から必然的に公用アラム語や西アラム語の要素が含まれることは言及した。他方、後期古典マンダ語の終末の時期を特定化しえないが、文語として固定化された CM に対して、MM は変化が停止することがなく無文字のままであった平信徒の話し言葉として、直接古い歴史につながるものである。CM になく MM にのみ存在する語彙 (partonna 'flea', アラム語では CS purta'nā のみに残る), giš- 'all of ~' <シュメール語 Giš 'one' (クルド語 giš(t/k)?), kankuza 'chin' <後期古典語 kanzuza <アッカド語 kanzuzu 'gums' (CS kalzūzā 'chin'), boqwāš 'sunset' <古代ペルシア語 (アヴェスタ) baṛa 'god'-vāša 'wagon' などの古代語からの借用語が今なお使用されていることは、バビロニア進出後土着のアラム語を急速に吸収したことを雄弁に物語っている。

5. 8. **研究史** マンダ人の存在は、欧米においてイスラム教徒の著作での言及 (「湿地のサービー教徒」 aṣ-Ṣābi'at とか「沐浴する者」 Muḡtasilat, アラビア語イラク方言 Ṣubbi・総称 Ṣubba) により知られていた。マンダ人への言及は1560年に初出するが、17世紀になると学問的関心が高まり、ポルトガルの宣教師 (「聖ヨハネのキリスト教徒」と考えた) が派遣されたり、写本も将来された。CM の本格的研究は、様々な写本を基にセム語学の碩学ネルデケ Th. Nöldeke が著わした文法書 (1875) が出発点である。しかし実際の言語的・民族学的研究は英国のドラウアー女史 E. S. Drower (イラク側, 1930年代より) とマツーフ (イラン側, 1953年より) の現地調査の諸研究から始まる。両者による CM の辞書 (1963) や、後者による伝統的発音に基づく CM の文法書 (1965 b) の出版なくして、今日の言語研究やマツーフとルドルフによるマンダ人来源問題解明もありえなかった。しかし、MM に関してはマツーフの文法書の中に CM と対照させて並記されているだけであり、まだ独立した研究は存在しない。マツーフ以外に MM の研究者もいない状況下では、死滅に瀕している MM の調査は緊急の課題である。

5. 9. **言語作品** CM による多数の宗教文書が、幸いマンダ人のドラウアーに対する厚い信頼により出版されてきた。文学ジャンルはほとんど宗教に関するもので、詩歌も祈禱用である。前世紀末ペルシアの調査旅行をしたド・モルガンが示す著しく信頼性に欠けるテキスト (1904) を除けば、MM に関しては、マツーフが採取しローマ字表記した民話が1話 (1965 a) と前掲文法書に付された短い日常会話例があるのみである。

5. 10. **辞書** マツーフの前掲文法書 (1965 b) の付録にある英語—MM の語彙集があるのみである。約3100語含まれる。MM のテキストが目下のところ二つしかない以上、語彙集は現地調査

でもしないと増やしようがない。但しマツーフの指摘にある通り、簡単な日常表現にはこの数で十分であり、その他の必要はアラビア語・ペルシア語が補うであろうから、これ以上の MM 語彙採録が不可能であるとしても不思議ではない。

#### 5. 11. 主要研究書 MM に関しては次の三篇のみ。

Macuch(1965a), R.; The bridge of Shushtar, *Studia semitica philologica necnon philosophica Ioanni Bakoš dicata, Bratislava, pp.* 153-172

——(1965b); Handbook of classical and modern Mandaic, Berlin

Morgan(1904), J. de; Etudes linguistique, IIe partie: textes mandaïtes, *Mission scientifique en Perse, tome V*, Paris, pp. 273-286

参考のためマンダ人問題と CM の基本文献を挙げておく。

Drower(1939), E.S.; The Mandaean of Iraq and Iran. Their customs, magic and folklore, Oxford, repr. Leiden, 1962

——& Macuch, R.(1963); A Mandaic dictionary, Oxford

Nöldeke(1875), Th.; Mandäische Grammatik, Halle, repr. Darmstadt, 1964

Rudolph(1960-61), K.; Die Mandäer, I. Prolegomena: das Mandäer problem, II. Der Kult, Göttingen

——(1978); Mandaicism, *Iconography of religions XXI*, Leiden

Yamauchi(1966), E. M.; The present status of Mandaean studies, *Journal of Near Eastern Studies*, vol. 25, pp. 88-96

### 6. 0. MM の言語概要

ドラウアーは現地調査で raṭna (MM -ræṭna 'gossip' CS reṭnā 'murmur'アラビア語 raṭānat 'lingo, gibberish')と呼ばれる口語があることを知ったが、かなり劣化した状態だったので注意を払わなかった。イラン側で調査し MM を発見したマツーフがイラク側マンダ人に直接調べたところ、既に彼らは MM を理解しないことを確認した。一般に BA にきわめて近い存在である CM に対して、MM はそのかなり忠実な発展形である。

6. 1. 音韻論 bgdkpt の摩擦音化規則は、伝統的発音からみる限り CM はかなり乱れている (d は常に閉鎖音, 他は語頭での閉鎖音を除き一定しない) が, MM はこの状態を反映している。興味深いのは CM の抽象名詞語尾 -uta [-u:θa] が MM で -oxta になることである。マツーフは dukta [doxta] 'place'の類推によると言うが, MEA 北方言 (サラマス) の ū>u, ux を想起させる (1.9. 項を見よ)。強勢は語末より第 2 音節にある。

6. 2. 人称代名詞独立形 3・2 人称複数で性の区別を保持していることが, MEA・現代中部アラム語 Modern Central Aramaic (MCA)と異なる。3 人称には遠指示代名詞が用いられる。

	sg.	pl.m.	pl.f.
3	hāx~ā	hannox~hannī	hannex~hannī
2	āt	atton	atten
1	an (anā)	anī~enī (anīn)	

人称代名詞独立形

6. 3. 人称代名詞接尾形  $A_1 \cdot A_2$  人称代名詞前接形に由来する接尾形  $A_1$  は次の通り。これらの形は CM 独立人称代名詞に基づくことは明白である。但し 2 人称複数は一般にコプラ ext- により代用される。3 人称単数 ye/ī は、マツーフによればペルシア語の *yāyi waḥdat* と関係があるとされるが、これを ye/ī と関係づけるのは説得的ではなく、特に ī は再検討が必要である (6.10. 項、特に末尾を見よ)。用例はコプラ (6.9. 項) 参照。

	sg.	pl.
3	ye( <i>m</i> )    ī( <i>f</i> )	non
2	yat	(ton)
1	na(n)	nīn

接尾形  $A_1$ 

未完了相活用語尾としての接尾形  $A_2$  は、未完了相語幹となった *a.p.(abs.st.)* の語尾と CM の人称代名詞独立形前接形の形態音韻的变化の結果、接尾形  $A_1$  と異なる次の諸形式を持つ。

	sg.	pl.
3	φ( <i>m</i> )    a( <i>f</i> )	en
2	et	ettōn( <i>m</i> )    etten( <i>f</i> )
1	nā	enni(n)

接尾形  $A_2$ 

6. 4. 人称代名詞接尾形 B CM では複数名詞に対する接尾形の一般化により BA・MEA と同様に名詞の数の区別が中和していたが、MM では名詞の複数語尾 -ān の一般化に伴い数の区別が可能となった：kədāβ-ī ‘his book’；kədāβ-ān-ī ‘his books’。この珍しい復古的傾向は MM の大きな特徴である。

	sg.	pl.
3	ī( <i>m</i> ) a( <i>f</i> ) ; ②īdī( <i>m</i> ) īda( <i>f</i> )	u( <i>m</i> ) e( <i>f</i> ) ; ①ū ; ②īdu
2	ax( <i>m</i> ) ex( <i>f</i> )	xon( <i>m</i> ) xen( <i>f</i> ) ; ①②oxon( <i>m</i> ) exen( <i>f</i> )
1	e ; ②īn	an

接尾形 B

接尾形B（上表中①②以外）——名詞に接尾される。

接尾形B'（上表中単数では②以外，3・2人称複数では①）——〈a〉前置詞〈b〉giš-d- 'all of~' 〈c〉動詞（目的語）〈d〉ext-/lext- 'he is(not)~'・ehl-/lehl- 'he has (not)~'に接尾され人称・性・数を示す。

接尾形B''（上表中3・1人称単数と3・2人称複数では②）——〈a〉独立所有代名詞{ald-} 〈b〉-d- を介して接尾形Bをとる前置詞に接尾される。

6. 5. 独立所有代名詞 dil-(CS, CM)でなく dīd-の発展形{ald-}を持つ：3.sg.m. aldidī = al-dīd-ī 'his', その他の人称は ald-。

6. 6. 指示代名詞 CM と異なり MEA と共通する現象を示す。非生物名詞の複数には hā を除く単数形が用いられる。指示代名詞は形容詞的用法の時，名詞に先行する。

	sg.	pl.	指示詞
'this'	ā~hā~ahā	ahnī~hannī	
'that'	hāx~āx	hannox(m) hannex(f); axnī(m/f)	

6. 7. 疑問詞 mū(CM **ma**, **ma-hu**, **mu**)と qā-mū は MEA(U)に平行形を持つ(2.2.8. 項, MCA は qay)。但し qā は独立形としては qam(CM・MM) 'for the sake of'であるから, MEA の前置詞 qā 'to, for'の来源を証明する貴重な存在である。hem<CM **hamnia**, **hamnu**(<\*hay-minn-eh/ēhōn 'which of it/them') ; kem<CM **kma** [kemma]; now'e< アラビア語 naw 'way, manner' ; elyā=CM **lia**<\*l-'ay 'to which' ; hemdā<hem+'dan(CM 'time') ; keθ<CM **kd** 'as, like'。

何	誰	どれ	いかに	どこ	いつ	どれだけ	なぜ	疑問詞
mū~mo	man	hem	kem, hem now'e	elyā	hemdā	keθ kem	qā-mū	

6. 8. 関係詞 CM の関係詞 d[ad] は消失し, ke が登場した : hannex ke qo-mzābn-en halβ-ū 'those(f.) who sell their milk'。前者は現在, 借用語及び幾つかの前置詞に接尾形Bを付す時の接中辞 -d- として残るのみである : kef(アラビア語 kayfa 'how')-d-ax 'your(m.) good cheer' ; qam-d-ax 'for you'。BA で kad(CS kad, CM **kd** [keð /kæð]) と平行して用いられる kī 'at the time when'のように, 口語として存在し続けた \*kī(<kē 'like; as' +z/dī(関係詞), 公用アラム語・聖書アラム語 'like that which~') が MM で突然関係詞 ke として現われることはかなり衝撃的である。その他の統語的用法も BA kī に類似しているので, ペルシア語 ke (who? ; that (conj); 人称代名詞と共に起して関係詞) とは偶然の一致である。



6. 9. コブラ CM で一般的であった **ait**[iθ] + 接尾形 B は消失し, CM '**ka**[ekka] 'there is' (<'it (there is) + kā(here), BA 'ikkā) に関係詞 **-d-** を介して接尾形 B' を接尾する形式 **ext-** が登場した。MEA に BA 'ikkā は現われないので, これは MM の特徴である。「A は B である」の表現には, その他, 人称代名詞独立形に由来する接尾形 A<sub>1</sub> など次の三つの表現形式が存在する。次表中の形容詞の位相は, 次項 6.10. を見よ。

	主 語	述 語	形容詞位相
I. 接 尾 形 A <sub>1</sub>	人称代名詞独立形は省略可	一語のみ; 二語の時接尾形 A <sub>1</sub> を反復	abs.st.
II. ext-接尾形 B	〃	一語又は一語以上	abs.st.
III. φ	人称代名詞独立形に限る; 省略不可	形容詞のみ	det.st.

#### コブラの表現形式

次の用例中, 述語の部分は [ ] で示す。

I の例: gaβrā [šəβir-φ]-ye 'the man is nice'

enī [rab-φ]-ni u [basīm-φ]-ni 'we are great and charming'

[kem]-ye kef-d-ax 'how is your good cheer>how are you?'

II の例: (hax) [šəβir-φ] ext-ī 'he is nice'

hāx [gaβrā rabbā] ext-ī 'he is a great man'

man [hemke hāx gaβrā] ext-ī 'who is like that man?'

III の例: hax [šəβir-ā]-φ 'he is nice'

atten [rabb-ān-a]-φ 'you(pl.f.) are great'

I の接尾形 A<sub>1</sub> において 2 人称複数是一般に用いられないので, II により表現される: (atten) basīm-φ-ton(I) = (atten) basīm-φ ext-oxon(II) 'you(pl.f.) are charming'. 又, p.p. は 3. pl. も II による: getel-φ ext-ū 'they are killed'. 否定は lext-(CM like [lekka] 'there is not') を用いる: βād-ex mend-ī lext-ī 'your (sg.f.) work is not a thing'. 上記のコブラ表現形式は時制を持たないので, 動詞  $\sqrt{h-w-y}$  'to be' の活用が過去 howā と未来 qa-hāwī を表現する: ēka rab qa-hwī-na, qošēn qa-leβēš-na 'when I (shall) be big, I shall be (lit. wear) a soldier'.

尚, 所有表現は ehl- (否定 lehl-) + 接尾形 B' により示される: CM '**t l-h** [iθ li] 'there is to him >he has' >ehl-ī. \*θ >h に注意。

6. 10. 名詞・形容詞 BA よりも位相を比較的良く保存していた CM の傾向を受け継ぎ, MM は新たな形で位相体系を形成した。これは, 男性複数語尾 -ān の一般化と, 関係詞 **d-** の消失による構成位相の強化 (属格構成(2)・(3)の消失, 2.3.1. 項参照) の結果である。位相体系は MWA も良く保存するが, 構成原理と用法はかなり異なる (8.9. 項参照)。マツーフ (1965 b, p. 206) は名詞・形容詞の位相語尾をまとめて一覧表にするが, 両者は MM で異なるので本稿では分離して扱

う。一般に彼は CM の枠組で MM を記述するので後者の特徴が十分明らかになっていなかったり、資料が不十分なのか必要な例や情報に欠けることが多い。従って以下の記述は彼のものとは多少異なる。

	sg.			pl.		
	abs.st.	cst.st.	det.st.	abs.st.	cst.st.	det.st.
m.	∅ ; ī	∅ ; e	ā	ān-i	ān-∅	ān-a
f.	ā	aθ ; θe	tā	āθ-i	āθ-∅	āθ-a

名詞の位相語尾

名詞の一般的形式は *det.st.* であり、*abs.st.* は個有名詞・副詞的表現・否定文・kol(every)の後等で用いられる：yūmā ‘a/the day’；yūm qa-yum ‘day by day’。しかしこの区別は厳密でない。*abs.st.* ī/i はペルシア語の *yāyi waḥdat* (不定名詞語尾-i) から借用され、不定性を強めるものである。複数は語尾-ān の一般化のため必ずしも性と語尾形式とが一致しない。*cst.st.*-e はペルシア語 *yā-yi idāfah* (セム語の *nomen regens* に相当する語の語尾 -e) の借用に他ならない。*det.st.* -ā も無原則に *nomen regens* になりうるので、属格構造には次の三形式が存在する：kedāβ-∅ (book) gaβrā(man)；kedāβ-e gaβrā；kedāβ-ā gaβrā ‘the book of the man’。この順に頻度は低下する。

形容詞はマツーフのデータを整理すれば、次のようになると思われる。表中 ( ) 内は *p.p.* の形である (後述)。

	sg.		pl.	
	abs.st.	det.st.	abs.st.	det.st.
m.	∅ ; ī	ā	∅	ān-a
f.	t;(a/∅)	tā;(a)		

形容詞の位相語尾

*cst.st.* はない。限定的用法の時、先行する名詞と一致する (複数・*f.* *det.st.* の例なし)：mend-ī šβīr-ī ‘a good thing’，yūm-∅ t̤āβ-ī ‘a good day’。しかし特に女性名詞において *sg.det.st.* は *abs.st.* で代用されることもある (マツーフによる、しかし少なくとも MM では再検討が必要)。

叙述の用法は、古くからのアラム語の規則通り *abs.st.* を取る (例はコプラ6.9. 項)。従って hax šβīr-ā (*det.st.* コプラⅢ) は本来 ‘he is the nice (man)’ である。代名詞・動詞と異なり、コプラの述語としての形容詞は 3.sg.f. を除き性の区別をしないので、その語尾は一般に -∅。3.sg.f. の場合のみ次の五形式を持つ。

(1) コプラⅠ：eθθā raf-t(*abs.*)-ī(A<sub>1</sub>) ‘the woman is great’

(2) コプラⅡ：ā eθθā raf-t(*abs.*) ext-a ‘this woman is great’

(3) コプラⅢ：hāx raf-ta(*det.*) ‘she is great’

動詞の非定形である分詞が述叙的に用いられると、後期アラム語では形容詞と同じく *abs.st.* を取った。従って、MM の *p.p.* もコプラⅡ (ext-) と共に使用される時の *f. abs.st.* には、予想される \*gəṭil-t でなく CM からの古い *f. abs.st.* 語尾 -ā を持つ gəṭil-ā ‘killed’ が残り、しかも一般の形容詞と異なり 3.sg. だけでなく 2.sg. においても性を区別するために使用される。次例を上(2)と比較せよ。

(4) コプラⅡ：gəṭil-a(*abs.*) ext-a/ex ‘she is/you(*f.*) are killed’

更に *p.p.* がコプラⅠ (接尾形 A<sub>1</sub>) の構造で使用される時 3.sg.*f.* が取るべき *f. abs.st.* は gəṭil-φ である。

(5) コプラⅠ：eθθā gəṭil-φ-ī ‘the woman is killed’

これは動詞的性格の強い叙述的用法の *p.p.* があくまで古来の *abs.st.* -ā を保持しようとした結果、CM の女性語尾 \*-tī (後述) の誤分析より発生した MM の新しい *f.sg.abs.st.* -t の接尾を拒否したためである。従ってこの -t と -ī (接尾形 A<sub>1</sub>) の発生が二次的であることを示唆するものである。*p.p.* の女性語尾 -t の拒否は徹底しており、限定位相の女性名詞を修飾する際も -t は現われない：eθθā gəṭil-a/šəṭir-tā ‘the killed/nice woman’。この例は一個のみであるが、位相の交替 (マツーフ1965 b, § 246) でなく *p.p.* の動詞的特性に由来すると思われる。

周知の如く女性語尾 -tī は *f.sg.det.st.* -tā の変異形として BA・CM で既に出現していたが、1～2個の名詞を除いては10個前後の形容詞に限定されていた。C. Brockelmann (GVG, p. 225) のように女性語尾 (ā>ē) の接尾と見るか、C. Levis (Grammar 1900, §§ 69, 988) のように imāla (ā>ē>ī) と考えるかは別として、ネルデケ (1875, p. 155) の言うように、なぜ若干の形容詞のみこの形を持つのか不明である。しかし MM の -tī は形容詞の叙述的用法語尾として定着 (マツーフ1965 b, p. 156) しており、唯一のテキスト (同1965 a) の中にもこの語尾の限定的用法は皆無である。従って、以上のコプラの述語としての用法分析を通して知られるように、MM では -tī = -t(*f.sg.abs.st.*) + -ī (接尾形 A<sub>1</sub> 3.sg.*f.*) と意識されていることは明白である。こう考えてのみ次の文は理解可能である：ā godār(*f.*) [ald-oxon]-ī ‘this ford is yours’。少なくとも BA には限定的用法の例も存在するが、-ī の来源は yāyi waḥdat でなく、後期アラム語の人称代名詞独立形 hī ‘she’ のコプラ的用法に遡るのかもしれない：eθθā šəṭir-t-ī < \*šəṭir-tā(*def.*)-hī ‘the woman is the nice one’。マツーフ (1965 a, p. 168) の āt bārāt(*abs.*) raf-t-e(y)-yat ‘you are my big daughter’ も \*baratt-ē raf-tā でないその統語的異常さ ([名詞+形容詞]+接尾形 B') を考えれば、あるいは [bārāt raf-t-ī]-yat ‘you are a girl who is big’ であるかもしれない。

# 6. 11. 動詞組織

	Peal(=U I)	Ethpeel(=MCA I pass.)	Pael(=U II 1)	Ethpaal(=MCA II pass.)	Aphel(=U II 2)
未完了相 Impf.	qa-gātel-A2	qa-megtal-A2	qo-mbarrex-A2	qa-mkāmmar-A2	qə-mahreβ-A2
完了相 Perf.	geṭal-X	egtel-X	barrex-X	ekammar-X	ahreβ-X
命令形 Impt.	geṭol	egtel	barrex	ekāmmar	ahreβ
能動分詞 a.p.	gātel	megte/al	(ə)mbarrex	(ə)mkammar	mahreβ
受動分詞 p.p.	geṭel~geṭil	————	(ə)mbarrax	————	————
意味	to kill	to be killed	to bless	to come back	to destroy

動詞組織一覧

時制では完了相に CM の完了形が残り、 $p.p. + 1-$  (=Uの完了相) は CM でも CS ほど多用されなかったため、優勢となれなかった。未完了相には  $\{qa\} + a.p. +$  接尾語形  $A_2$  に由来する形式が現在・未来に用いられ、MEA・MCA と同様に未宗了形(CM  $ni-g\tilde{t}ul$ )を駆逐した。完了相活用語尾 X は次のとおり (語幹は母音語尾の時  $geṭil-$ )。CM 語尾に忠実に遡る。

	sg.		pl.	
	m	f	m	f
3	ϕ	at	yōn	yān
2	t	īt	ton	ten
1	īt		nī	

完了相活用語尾 X

一方、派生型のうち能動型はすべて保存されているが、再帰型 Ethpeel・Ethpaal の  $-t-$  は BA のように第1 語根に同化することにより脱落した。頻度の高くない再帰型は対応する Peal・Pael と混同されるし、Aphel のそれ(Ettaphal)は存在しない。それゆえ、受身は次のように表現されることの方が多い (6.10. 項後半参照)。

未完了相( $qa-megtal$ ) =  $\langle a \rangle p.p. +$  接尾形  $A_1$  ( $gaṭil-ye$ )、又は

$\langle b \rangle p.p. + ext-$  ( $geṭel ext-ī$ )

完了相( $egtel$ ) =  $p.p. + \sqrt{h-w-y}$  ‘to be’の完了相( $geṭel howā$ )

一部の状態動詞は、この受身表現と同じ形式により時制を表現する： $\check{s}exe\beta-ye$  (未完了相) ‘he is asleep’； $\check{s}exe\beta howā$  (完了相) ‘he was asleep/slept.’ これは後期アラム語の段階でもよく知られていた、 $p.p.$  の能動的用法の反映である。尚、状態動詞の区別については MCA(4.10. 項) と MWA (8.11. 項) を、 $p.p.$  の用法については MEA (2.4.4. 項) を参照せよ。

$p.p.$  は、CM・MM とともに CS のように  $-a-a-$  であり、BA・MEA のような  $-u-a-$  は CM に数

例見られるのみである。CM の不定詞は BA・MEA と同様に -a-u-i を持つが、MM の不定詞はマツーフが言及しないので不明である。おそらく単純な表現にしか用いられない MM に不定詞の必要性がなく、消失したと思われる。いずれにしても、コプラ・ $\sqrt{h-w-y}$  による複合時制が、受身表現に代替的に用いられるのみで発達しなかったことに着目せねばならない。

6. 12. アラビア語・ペルシア語の影響 語彙のみならず、比較級語尾 -tar のペルシア語からの借用, eβad(to do)・tāmmā (to become)・māhā (to strike)を用いる借用表現(ペルシア語 kardan・šudan・zadan=アラビア語 ḍaraba) の存在は、近接言語の深い影響を示している。

## 7. 0. 現代西アラム語(MWA)

7. 1. 言語名 後期西アラム語につながる唯一の現代語である現代西アラム語 Modern West Aramaic(MWA)は、発見者フェレット J.Ferrette と、現地調査したパリゾ M.D.J. Parisot により、シリアのアラム語であるゆえに新シリア語 Neo-Syriac と呼ばれた。しかし後期東アラム語である古典シリア語 Classical Syriac(CS)を連想させるこの呼称は、ネルデケ Th. Nöldeke による西アラム語的特徴の指摘以来用いられなくなり、地名を入れた次のような名称が使用されている：マアルーラの(新)アラム語方言(neu-)aramäischer Dialekt von Ma'lūla, 新後期アラム語 das Neu-Jungaramäische, アンチ・レバノンの新西アラム語方言 neuwestaramäische Dialekte des Antilibanon, レバノン・アラム語 Libanon-Aramäisch, 現代シリア・アラム語 Modern Syrian Aramaic。本稿では、諸アラム語が混在する中近東で地名を用いるのは不適切であるから、現代東アラム語 Modern East Aramaic(MEA)との対比が明瞭な現代西アラム語という用語を使用する。自称はシリア語 siryōn である。

7. 2. 分布域・話者数 ダマスカスの北、レバノン国境に近いアンチ・レバノン山脈中でダマスカスーホムス道路を西側に入ったところの3ヶ村で用いられる。中心の村マアルーラ Ma'lūla はダマスカスより直線距離で約42km, バファ Bah'a はマアルーラの北北東約7km, ジュップ・アディーン Ġubb 'Adin はマアルーラの西南西約5kmにある。レーシュ S. Reich の調査(1936年)では、マアルーラの住民はギリシア合同教会派 Catholic Greek=Byzantine Uniat 1235人, ギリシア正教徒 Orthodox Greek=Byzantine Orthodox 540人, ムスリム178人計1953人であり, バファ809人とジュップ・アディーン1037人は皆ムスリムである。総計3799人の他にダマスカスで働いている者もいたからもう少し増えるが、この調査以降新しい資料は皆無で話者数の増減も不明である。山岳北帯とは言え首都に近いのでアラビア語の影響が一層強くなっていると推定されるが、バファで1955年, ジュップ・アディーンで1971年夏方言調査が行われているのでまだ話者は存在する。

フェレットの報告以前にも、18世紀の旅行者により生きたアラム語存在の伝聞は伝えられていた。シリア経由で帰国(1765-6)したニーブール C. Niebuhr やヴォルネイ C.F.Ch. Volney (1783-5), ブラウン W.G. Browne (1792-8)によれば、上記3ヶ村以外の近隣の村が含まれている。

ほぼ一世紀後のプリム E. Prym とゾチン A. Socin の調査 (1869年秋) には含まれていないので、この間にアラビア語と交替した可能性がある。それらはセドナーヤ Šednāya (1184年の記録あり)、マアッラト・ル・バーシュ Ma'arrat el-Bāš, アイヌ・ッ・ティーネ 'Ayn et-Tīne である。

7. 3. 歴史・系統問題 これらの村落が過去においていつギリシア正教会になったのか不明であるが、当初は古い東方教会のいずれか、多分ビザンツ皇帝派 (後述) に属していたものと推定される。ちょうどキリスト単意論マロン派 Monothelite Maronite (キリストの中に神と人間に分裂しない一つの働き・意志のみが存在するとの立場、680年異端とされるが1182年以降ローマの権威を認めた) が北シリアのオロンテス川付近に起源を持ち現在レバノンに在るにもかかわらず CS 西方言を典礼用語、アラビア語を日常用語としているように、マアルーラでも長く CS が典礼語であった (現在はアラビア語)。

しかし典礼語としての CS も自称「シリア語」も彼らの言語の本質を表わさない。次項に見るように MWA は疑いもなく後期西アラム語の発展形であり、後期東アラム語の CS とは全く異質のものである。従って東方教会の複雑な歴史の中で CS をいつの頃からか教会用語として採用したものの、日常語はユダヤ人・キリスト教徒・サマリア人の用いた言語と同系の、パレスチナ帯に広がっていた西アラム語を現在まで話し続けているとみなさなければならない。

この意味でキリスト・パレスチナ・アラム語 Christian Palestinian Aramaic(CPA) = Syro-palestinian(6-13世紀)が場所年代ともに一番近いと推測されるが、CPA の用いるシリア文字の一種 (初期のエストランゲロー Estrangelō に似ている) を知らないしその写本も持たないようである。CPA は、おそらくユスチニアヌス帝 (527-565) の非キリスト教徒弾圧の中で強制改宗させられたユダヤ人が、ユダヤ地方北方で形成したビザンツ皇帝派=メルキタイ Melchite (他の東方教会と異なり451年のカルケドン公会議の決定と皇帝の立場を支持する) に属する小さな教団の言語である。従って CPA は当時 (6-8世紀) の後期西アラム語を中核としているが、その中には当然のこととしてユダヤ人社会のラビ・ヘブライ語 Rabbinical Hebrew やタルゲーム Targum の影響が見られるので、CPA を MWA の直接の祖先とみなすことは不可能である。宗教的に見れば、ギリシア正教 (後世のイエズス会などの干渉で多数が合同教会派になる) の彼らが皇帝派に近いことは明らかであるが、典礼用語は CAP と CS の間で決定的な相違がある。

目下のところ、バル・アシェル M. Bar-Asher による CPA 写本・文法研究 (1977) のような後期西アラム語の確実な資料がそろくまでは、CPA と比べるパリゾの努力にもかかわらずマアルーラの MWA の来源究明も決定的となりえない。

7. 4. MWA の位置付け 以上の理由で、MWA は次の諸点を先行する後期西アラム語と共有するという一般的な表現で、今のところ満足せざるを得ない。本稿で比較する後期西アラム語は、特に CPA (バル・アシェルによる) とことわらぬ限り母音が比較的に確認できるユダヤ人のガリラヤ・アラム語 Galilean Aramaic(GA)=Jewish Palestinian Aramaic である。GA でも母音不明ならば星印 (\*) を付す。

	MWA	後期西アラム語 (GA)	後期東アラム語 (CS)	公用アラム語／聖書アラム語
(1) 未完了形 3 人称接頭辞	y- (接統法)	y-	n-	y- (/l-)
(2) 未完了形 1 人称目的語	y-ḥunq-enn-e	y-ktb-yn-yh	ne-qṭēl-eh/iw(hy)	'ā-hōdē'-inn-eh
(3) 'to see'	eḥmi<*ḥmī	ḥāmā	xēzā	ḥāzā
(4) 'under'	erra'<*el-ra'	lē-ra'	lē-taxt	tēḥōt
(5) 'today'	imōdī	yōmā dēn	yawmān(ā)<*yawmā dēnā	ywm' znh

## MWAの西アラム語的特徴

(2)は左より順に '(that) he choke it' ; 'he writes it' ; 'he kills it' ; 'I inform him' . -enn/inn- は本来未完了強調法の語尾 *nun energicum* (ネルデケの *nun epentheticum*) であり、聖書アラム語では要求法でなく直接法に現われる。従って西アラム語では直接法が一般化し、東アラム語では要求法が広まったと言える。

尚、完了相・接統法以外の述語に対する否定詞 *čū* は、MEA の不定形容詞 *cu*[tʃu]'no' (<クルド語ハカリ方言*chu*) に似ているため、過去における MEA との関係を示唆する人もいるが、現代中部アラム語 *Modern Central Aramaic* (MCA) に存在しないことや直接的接触の可能性が薄いことなどにより、その可能性は無い。GA・CPA のコプラ否定詞 *\*layt*/*\*lēt* は人称代名詞独立形を接尾する (CS では接尾形 B)。ゆえに *\*lēt-hū* 'it is not' > *lēṭū* > *lēčū* > *čū*。一般に *t* は保存されるが、事情は異なるにしても *šaqī-ič* < *\*šaqī-īt* (GA *šēqal-t*) 'you took', *eḥmi-č* < *\*ḥāmī-t* 'you saw', *ibheč* < GA *bēhet* 'he was ashamed' のように *t* > *č* の例もある。無理も少しあるが、他の提案よりは蓋然性が高かろう。

7. 5. 研究史 フェレットの報告とそれを詳細に検討したネルデケの研究 (1867) の後、プリムとゾチンが現地で多くのテキストを採録した (1869) が、すぐには出版されなかった。フェレットの報告は短い主の祈り (マタイ伝 6 : 9-13) の訳を中心とする簡単なものであるが、ブリス F.J. Bliss は名詞と動詞の変化、短い文例も含むものを集め (1888) で発表した。文法・語彙の全容はフランスのシリア調査団の一員であるパリゾの調査 (1896-7) により明らかにされた (出版 1898)。これは地誌も含む意欲的な研究で、後期西アラム語の CPA との比較も試みているが、不正確な音声表記は研究の十分な基礎となりえなかった。その後、三回にわたる (1914, 1919, 1930) 調査で当時珍しい録音板に集録したベルクシュトレーサ G. Bergsträsser は、自らのテキストとともに埋もれていたプリムとゾチンや後者の弟子シュトゥンメ H. Stumme のテキストをも編集して出版し (1915) たり、当時入手可能なすべてのテキストを対象にした語彙集を編纂した (1921)。これらの信頼性あるテキストを基に、ベルクシュトレーサの弟子シュピターラ A. Spitaler が師の他界直前にミュンヘン大学懸賞入選論文として、マアルーラ村方言の文法を完成させた (出版 1938)。彼はレーシュによる調査 (1936) の結果をその公刊 (1937) 以前より利用し、疑問点を現地で確認して貰うという方法で研究したので、自らは現地を踏むことなくとも MWA 唯一の文法を

著わすことができた。しかし直接話者に対する対面調査をしていないので名詞・動詞のパラダイムが不完全（複数の語彙を用いる）である、不必要に通時的視点が多くその比較対象の後期西アラム語(GA・CPA)資料も時代的制約により信頼性が無い、記述の枠組に後期西アラム語のそれを用いたため MWA の文法枠組がよく把めない、統語論がない、さらに彼の弟子が師の不適切な文法を墨守して調査の機会があるにもかかわらず記述文法を著わさなかったこと、等々がその後の研究を大きく制約した。第二次戦後やっと現地調査した（1955）シュピターラは、マアルーラとバファアのテキストを採録したが、その後は弟子にまかせたので、統語論はコレル C. Correll が完成した（1978）。

一方他の二ヶ村の方言は、1902年パリゾが短いテキストを発表したが方法論上の問題があり信頼できない。本格的調査はレーシュの採録テキストとそれに基づくシュピターラの短いまとめ(1937)のみであった。ずっと後になりコレルは師とレーシュのテキストにより、バファア村方言の文法・テキスト・語彙をまとめた（1969）。ジュップ・アディーン村方言も別の弟子カンタリノ V. Cantarino が調査し（1954）テキストを出版した（1961）。しかし誤植・誤解も多いとの理由で、コレルが再調査（1971年夏）し、マアルーラ村方言統語論の付録として文法・テキスト・語彙をまとめた（1978）。発見以来100年以上経過してやっと信頼ある基礎資料が整ったばかりである。だが、マアルーラの記述文法もなく、他の二方言も不十分なシュピターラの文法によりマアルーラとの相違のみを記すという状態なので、実質的研究はこれからである。

7. 6. 言語作品  少くとも聖職者は典礼語である CS 西方言のシリア文字セルトー *sertō*（‘ひっかき跡’）に精通していたのに文字化の努力をしなかったし、イエズス会もそこまではしなかったので文字化された言語作品は残していない。西欧の研究者が言語学資料としてローマ字表記で採集した民話・伝承・民族学的テキストがあるのみである。いずれも文学作品にはほど遠い。

7. 7. 下位方言の特徴  マアルーラ（M）、バファ（B）、ジュップ・アディーン（Ĝ）相互の方言関係は、最大のM方言の記述文法すらない現状では十分明らかにしえないが、シュピターラの小論（1937）とコレルの研究により、主たる特徴を次に掲げる。

(1) \*k の対応関係  (2)関係詞  (3)人称代名詞接尾形 1 人称単数  (4)同 2 人称複数男性  (5)同 3 人称複数男性  (6)新*abs. st.* 複数男性  (7)同女性  (8) ‘what’ (9) ‘who’ (10) コプラ過去形 *w-* と動詞活用形式 Y の接頭辞の位置関係 ‘I was’。文法術語に関しては 8.0. 項以下の説明を見よ。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
M	k	ti	i ~ ϕ	ḥun	un	i ~ ϕ	an	mō	mōn	wnōb
B	k	či	ϕ	ḥun	un	ϕ	ϕ	mā	man	nwōb
Ĝ	č	ti ~ či	ai ~ ϕ	ḥun ~ ḥ	un ~ ϕ	ϕ	ϕ	mā	man	?

下位方言の特徴



7. 8. 辞書 ベルクシュトレーサのマアルーラ方言語彙集(1921, 書名は次項を見よ)があるのみ。活字でなく手稿そのままの印刷であり, 語根配列に似た子音配列であるので, いずれかの後期(西)アラム語の知識が無ければ利用は困難である。この出版以降のテキストの語彙はカードを作ったり, 他のアラム語辞書を利用したり, アラビア語(シリア方言)の辞書を参考にする。他の二ヶ村の方言は, コレル(1969, バファア村)と同(1978, ジュップ・アディーン村)に簡単な語彙集があるのみ。

#### 7. 9. 主要研究書

Bergsträsser(1915a), G.; Neuaramäische Märchen und andere Texte aus Ma'lūla hauptsächlich aus der Sammlung E. Prym's und A. Socin's (*Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes* = *AKM*, Band XIII-Nr.2), Leipzig, repr. Nendeln, 1966

———(1915b); Neuaramäische Märchen und andere Texte aus Ma'lūla in deutscher Uebersetzung hauptsächlich aus der Sammlung E. Prym's und A. Socin's (*AKM*, Band XIII-Nr.3), Leipzig, repr. Nendeln, 1966

———(1921); Glossar des neuaramäischen Dialekts von Ma'lūla (*AKM*, Band XV-Nr.4), Leipzig, repr. Nendeln, 1966

Bliss(1890), F.J.; Ma'lūla and its dialect, *Palestinian Exploration Fund, Quarterly Statement*, pp. 74-98

Cantarino(1961), V.; Der neuaramäische Dialekt von Gubb 'Adin (Texte und Uebersetzung), Chapel Hill, N.C.

Correll(1969), C.; Materialien zur Kenntnis des neuaramäischen Dialekts von Bah'a, Inaugural-Dissertation, München

———(1978); Untersuchungen zur Syntax der neuwestaramäischen Dialekte des Antilibanon (Ma'lūla, Bah'a, Ġubb 'Adīn) mit besonderer Berücksichtigung der Auswirkungen arabischen Adstrateinflusses nebst zwei Anhängen zum neuaramäischen Dialekt von Ġubb 'Adīn, (*AKM*, Band XLIV-Nr.4), Wiesbaden

Ferrette(1863), J.; On a Neo-Syriac language, still spoken in the Anti-Lebanon, *Journal of the Royal Asiatic Society*, vol. 20, pp. 431-436

Nöldeke(1867), Th.; Beiträge zur Kenntniss der aramäischen Dialecte, *Zeitschrift der deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. 21, S. 183-200

Parisot(1898), M.D.J.; Le dialecte de Ma'lūla. Grammaire, vocabulaire et textes, *Journal Asiatique*, 9<sup>e</sup> Série, tome XI, pp. 239-312, 440-519; tome XII, pp. 124-176

———(1902); Le dialecte néo-syriaque de Bakha'a et de Djub'adin, *Journal Asiatique*, 9<sup>e</sup> Série, tome XIX, pp. 51-61

Reich(1937), S.; Etudes sur les villages araméens de l'Anti-Liban, (*Documents d'études*

*orientales de l'Institut Français de Damas, tome VII*), Damascus

Spitaler(1937), A.; Die neuaramäischen Dialekte des Antilibanon, *Zeitschrift der deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. 91, S.\*17\*—\*19\*

—— (1938); Grammatik des neuaramäischen Dialekts von Ma'lūla (Antilibanon), (AKM, Band XXIII-Nr.1), Leipzig, repr. Nendeln, 1966

信頼できる後期西アラム語は：

Bar-Asher(1977), M.; Palestinian Syriac studies. Source-texts, traditions and grammatical problems. Ph.D. dissertation submitted to the Hebrew University, Jerusalem (in Hebrew)

Kutscher(1976), E.Y.; Studies in Galilean Aramaic, translated from the Hebrew original and annotated with additional notes from the author's handcopy by Michael Sokoloff, Jerusalem

又批判的に使用しそのまま信用しないという条件で：

Dalmam(1905), G.; Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, 2. Auflage. Leipzig, repr. Darmstadt, 1978

Schulthess(1924), F.; Grammatik des christlich-palästinischen Aramäisch, Tübingen, repr. Hildesheim, 1965

## 8. 0. MWA の言語概要

8. 1. 音韻論 bgdkpt の母音後摩擦音化は次表のとおり。つまり摩擦音が残り、有声閉鎖音は無声化する。その影響で本来の無声閉鎖音は軟口蓋化する： $*t > \check{c}$ ,  $*k > [kj]$ 。k の軟口蓋化は ( $*g >$ )k に対しても一般化している。以上の例外となる  $*b > b$  は、二言語併用となったアラビア語に、対応する子音  $[v]$  が無いからであり、 $*p > f$  は  $*b > p$  の結果アラビア語での独立音素  $/f/$  の影響で異音から音素として定着したものである。語頭には常に摩擦音が現われる ( $*b > b$  の b を除く) ので、MEA・MCA との相違がきわ立つ： $d\check{o}da$  'paternal uncle';  $besra$  'flesh'。同一形態素内での音声環境の変化による摩擦音化は既に機能せず、後期西アラム語のそれに応じて閉鎖音 / 摩擦音の一方に固定しているので、異なった語根として定着する： $falle\check{g} < palleg$  'he divided';  $felka < pelg\check{a}$  'half'。二重母音は、aw の後の b・k を除き摩擦音化の原因となった跡を残す (CS はそうでない)： $payta$  'house'  $< bayt\check{a}$ ,  $awpel$  'he brought'  $< *awbel$ 。  $d > t$ ,  $t > \check{c}$ ,  $k > [kj]$  はアラビア語からの借用語にも見られるので、かなり古い変化である。

GA・CPA	b	g	d	k	p	t	$\underline{b}[v]$	$\bar{g}[\gamma]$	$\underline{d}[\delta]$	$\underline{k}[x]$	$\bar{p}[f]$	$\underline{t}[\theta]$
MWA	p	k	t	k[kj]	f	$\check{c}[t\check{s}]$	b	$\dot{g}[\gamma]$	$\underline{d}$	$\underline{h}[x]$	f	$\underline{t}$

強調音(咽頭化音)  $\text{ṣ}$   $\text{ṭ}$  の保存はあまり良くないが、咽頭音・声門音  $[\text{ʕ}]$ ,  $\text{ḥ}[\text{h}]$ ,  $[\text{ʔ}]$ ,  $\text{h}$  は良く残るので MCA に近い。

二重母音  $\text{ay}$ ,  $\text{aw}$  は、以前から閉音節で  $\text{ē}$ ,  $\text{ō}$  になっていた場合( $\text{bē}$  ‘house’  $\text{cst.st.} < \text{bēt}$ )を除きよく保存されるので、時には本来の  $\text{ē}$  が  $\text{ay}$  に変えられる： $\text{rayša}$  ‘head’  $< \text{rēšā}$ 。又、シリア・パレスチナ地域で前二千年紀より観察される  $\text{ā} > \text{ō}$  は、MWA にも現われる： $\text{bōla}$  ‘mind’  $< \text{bālā}$ 。この現象は紀元前のカナアン語のみならず、後期東アラム語であるのにシリアに近い CS 西方言(CS 西  $\text{rīšō}$ ：CS 東  $\text{rēšā}$ )にも現われるし、イスラムの前でアラビア語方言(イエメンとヒジャーズ)やアラブ人のアラム語(ナバダイ語・パルミユ語)、さらに現代アラビア語方言(パレスチナ北部とシリア北部)にも見られるので MWA に階定されたものでないが、MWA と MCA がこの現象を持つ点で MEA と明瞭に区別される。

強勢が後から第二音節に来る規則は強い影響力を持ち、長母音を保存する( $\text{yōma}$  ‘day’,  $\text{yumō}$  ‘days’)とともに、語頭重子音を持つ単音節語に強勢のある添加音を作り出す： $\text{iz}^{\text{I}}\text{'ur}$   $\text{sg.m.}^{\text{I}}\text{abs.st.}$  ‘small’； $\text{z}^{\text{I}}\text{'ōra}$   $\text{m.det.st./f.abs.st.}$ 。また語末が二重子音か長母音+子音で終わる時、自由交替形として  $\text{-i}$  が接尾される： $\text{hačč(i)}$  ‘you( $\text{m.sg.}$ )’,  $\text{hōš(i)}$  ‘now’。その結果、この条件下にあれば本来の語末  $\text{-i}$  も随意に脱落する。

8. 2. 人称代名詞独立形 3 人称の全てと 1 人数単数は、後期西アラム語の形式をほぼ保持している。1 人称複数  $\text{anaḥ}$  は GA  $\text{'ānan}$  に比べ  $\text{ḥ}$  を保有している点で特異であり、CPA  $\text{'n(y)n}$  ( $\text{'ānen?}$ )の変異体  $\text{'n(y)h}$  に比定されることもある。しかしこれはバル・アシェルが論証したように単数  $\text{*'ānā}$  に対する類推形  $\text{*'āne/i}$  であるから、そうした比定は成立しない。古い形式(例えば聖書アラム語  $\text{'ānāḥnā}$ )の  $\text{ḥ}$  の保存と考えるのは、後期西アラム語における全般的喉音の弱化現象(GA, CPA は前出；サマリア・アラム語  $\text{ān(ān)an}$ )を考慮すれば困難があるが、アラビア語の影響(シリア  $\text{neḥna}$ )と断定するのも今は決め難い。2 人称はすべて  $\text{h-}$  を持つ点で、MCA と共通する。その単数における  $\text{-i}$  に関しては、前項 8.1. の末尾を見よ。但し  $\text{*'atti}(>\text{*hačči})>\text{haši}$  を考えれば男性形の  $\text{-i}$  は二次的であるが、女性の  $\text{-i}$  は本来的である。2 人称単数の性における  $\text{č}$ ： $\text{š}$  の対立は、次表のように体系的なものである。

	人称代名詞独立形		活用形式 Y		活用形式 X		活用形式 Z		人称代名詞接尾形	
	m.	f.	m.	f.	m.	f.	m.	f.	m.	f.
GA	$\text{'att}$	$\text{'att(i)}$	$(\text{'att})$	$(\text{'att(i)})$	$\text{-t}$	$\text{*t(CPA-ti)}$	$\text{te-}$	$\text{*te-īn}$	$\text{-āk}$	$\text{-īk}$
MWA	$\text{hačč}$	$\text{haši}$	$\text{č-}$	$\text{š-}$	$\text{-ič}$	$\text{-iš}$	$\text{či-}$	$\text{ši-}$	$\text{-aḥ}$	$\text{-iš}$

2 人称単数代名詞要素の比較

従ってシュピターラ(1938, § 34)の議論にも拘らず、接続法は女性語尾  $\text{-in}$ 、完了相は女性語尾

-i の各脱落により生じた性区別の必要性が、人称代名詞独立形にも波及したものであり、独立形における異化は単独に生じたのでない。接尾形女性形  $-ik > i\check{s}$  は他のセム語にも在証される一般的変化であり、これが2人称単数における性区別を可能にしたと言える。2人称複数 は単数形と接尾形 ( $-hun$ ,  $-hen$ ) との合成であり、性区別は後者により可能であるから  $*ha\check{s}-hen$  とはならない。

	sg.		pl.	
	m.	f.	m.	f.
3	$h\bar{u}$	$h\bar{a}$	$hinn(un)$	$hinn(en)$
2	$ha\check{c}\check{c}(i)$	$ha\check{s}(i)$	$ha\check{c}-hun$	$ha\check{c}-hen$
1	$ana$		$ana\check{h}$	

人称代名詞独立形

8. 3. 人称代名詞接尾形 動詞の活用形式Yの説明(8.12.を見よ)に見る通り、MWA は人称代名詞独立形に由来する接尾形は存在しない。しかし、後期アラム語の完了形と未完了形が残っているため、これらに対応する完了相と接続法(及び命令法)には目的語を示す古くからの接尾形が存在する。後期アラム語に対応するこれらの形式の保存は MEA に比べて大きな特徴である。それらは基本的に以下に示すものと同じ音形を持つが、複雑な形態音韻の変化を示すので、本稿では省略する。MEA ウルミー方言の接尾形Bに対応する形式は次表の通り。

男性複数語尾(*det.st.*  $-öya/öy/ö$ )に終わる名詞を除き、一般に *det.st.* の語尾  $-a$  を脱落させた形式(=新*cst.st.*)に接尾される:  $s\bar{u}s-\check{c}-e$  ‘his mare’。  $-i\check{s}(2.sg.f.)$  は前項を見よ。  $-i(1.sg.)$  は8.1. 項末尾の規則により脱落することがある:  $pay\check{t}-i/pay\check{t}$  ‘my house’。  $-(n)a\check{h}(1.pl.)$  は独立形  $ana\check{h}$  と同様に  $h$  の存在は他の現代アラム語に類例がない。CPA 個有の変異体  $-nh(=ne)$  も含めて後期西アラム語に対応する形式はなく、MWA の独立形  $ana\check{h}$  より形成された新しい形であることは明白である。その他の形式は後期西アラム語に規則的に対応する。尚、3人称複数の  $ay-hun/hen$  は  $-ayn > -ay$  となることもある:  $lupp-ayhun > lupp-ayn > lupp-ay$  ‘their hearts’。

男性複数語尾を持つ複数名詞への接尾は、単数代名詞の場合  $-öy$ 、複数代名詞の場合  $-ay$  が接中される:  $bn-öy-i$  ‘my sons’,  $bn-ay-na\check{h}$  ‘our sons’。このうち  $-ay$  はどのアラム語にも現われる男性複数名詞 *cst.st.* の語尾  $-ay > \bar{e} > i$  に由来するものであるが、 $-öy$  の説明は困難である。複数名詞に対する「彼の」の接尾形は、*cst.st.*  $-ay$  に代名詞独立形  $h\bar{u}$  ‘彼’を接尾し  $-ay+h\bar{u} > *aw$  であった(ヘブライ語に同じ)が、アラム語は更に単数名詞属格で一般化した形式  $hi(-i+h\bar{u} > i+hi)$  を再度接尾させ( $*aw+hi$ : CS  $din-aw(hy)$  ‘his judgements’), GA・CAP は  $-öhi$  (聖書アラム語より)及び  $-öy$  であった。MWA 直前の形式はこのうち  $-öy$  であったと推定される。これに再度単数名詞に接尾される形式  $-e$  ‘his’ ( $<eh < ih < i+hi$ )を接尾させた現在の形式  $ayn-öy-e$  ‘his

eyes'が生まれ、誤分析により -ōy が単数代名詞の他の人称へと一般化したと考えるのが、もっとも蓋然性が高い。-ō, -ay の存在のために、接尾形付加による名詞の数の区別が、MCA・MEAのように中和することはない。

	男女単数・女性複数名詞				男性複数名詞			
	sg.		pl.		sg.		pl.	
	m.	f.	m.	f.	m.	f.	m.	f.
3	-e	-a	-un	-en	-ōy-e	-ōy-a	-ay-h-un	-ay-h-en
2	-aḥ	-iṣ	-ḥun	-ḥen	-ō-ḥ	-ō-ṣ	-ay-ḥun	-ay-ḥen
1	-i / ∅		-aḥ		-ōy(-i)		-ay-n-aḥ	

人称代名詞接尾形

8. 4. 独立所有代名詞  $\text{tīd} < \text{GA } \text{dīd} \text{ (CPA } \text{dīl})$  に単数名詞用の人称代名詞接尾形が接尾されて用いられるが、所有の特別な強調以外は殆ど用いられず、例はきわめて少ない： $\text{malka } \text{tīd-iṣ}$  'your(f.) king'。男性複数名詞に接尾される接尾形を用いれば所有物全体を示す： $\text{tīd-ōy-i}$  'my belongings'。

8. 5. 指示代名詞  $\text{hanna} < * \text{hā-dnā}$ ,  $\text{hōdi} < * \text{hā-dē}$  は CS と同じ構成原理であり、GA・CPA の  $\text{hā-dēn}$ ,  $\text{hā-dā}$  とは異なる。複数形  $\text{hannun}$ ,  $-\text{en}$  は CPA・CS の遠指示代名詞  $\text{hānōn}$ ,  $-\text{ēn}$  に対応し、GA  $\text{'ellayn}$ , CPA  $* \text{hālēn}$  は現われない。これらの近指示代名詞は指示機能が弱くなり、定冠詞に似た働きを持つが、名詞に前置する際  $\text{hōd(i)}$  の  $\text{d}$  は名詞の語頭子音に同化（したりその結果としての代償延長を）し、複数形は  $\text{hann}$  となる： $\text{hob-bisnīta}$  'this/the girl'。又指示詞は一般に前置詞を伴うと  $\text{h-}$  を脱落させる： $\text{lošunīta} < \text{l-ō-šunīta} < \text{l-hod-}$  'to this/the woman'。

遠指示代名詞では GA  $\text{hā-hū}$ , CPA  $(\text{h})\text{āw}$  は消失し、GA で稀に、CPA とサマリア・アラム語で時折用いられた動詞目的語を示す  $\text{yāt} + \text{接尾形}(\text{yāt-eh})$  の形式が、人称代名詞語頭の  $\text{h-}$  を伴って新たに生まれた： $\text{hōt-e/a}$ 。複数形は 3 人称独立形を接尾するが、強勢の位置により  $\text{haṭ-inn(un/en)}$ 。これは明らかに中期ヘブライ語  $\text{ōt-ō}$  'him' >  $\text{he himself}$  >  $\text{that one}$  からの借用形式で、ヘブライ語と

	sg.		pl.	
	m.	f.	m.	f.
this	$\text{hanna}$	$\text{hōd(i)}$	$\text{hann(un)}$	$\text{hann(en)}$
that	$\text{hōt-e}$	$\text{hōt-a}$	$\text{haṭinn(un)}$	$\text{haṭinn(en)}$

指示代名詞

MWA の先行言語 (GA・CPA に同一でなくとも近い言語) が接触し強い影響を受けたことを示すものである。ゆえに同じユダヤ人のアラム語でも、パレスチナから離れた BA にはこの現象はない。

8. 6. 疑問詞 mōn は GA・CPA man に対して mō からの類推が働いたというより, CPA tmn (\*tammān ‘there’)と同じ (数少ない) 母音記号が mn ‘who?’に用いられている事実を考慮すれば, CPA で既に \*mānになっていた可能性がある。mā ‘what?’>mō と共に mán>mōn は自明である。CS の方言的変異体 mōn の影響ではない。3 人称代名詞独立形が接尾すると音節構造により man が残る: man-hū>mannu ‘what is he?’. ēna はアラビア語よりの借用 (パレスチナ’ayni, ‘ēna)であり, GA・CPA の \*hā/ē-dēn は失われた。あるいは CS \*’aynā ‘which(m.)’に類似した語がかつて存在したと考えるべきか (4.6. 項をみよ)。ehma<kmā(n)は明白であるが, 規則的語頭音添加(brā>ebra ‘son’)に注意。

eh<CPA \*hēk には時折 t が接尾されるがこれは関係詞 \*dī の名残りである: hēk dī>’eht ‘how is it that~?’. 後期西アラム語の t は MWA において規則的にそのまま残るから (8.1. 項), emmat<’emmat+dī ‘when is it that~?’. hanukk(i)の末尾の -i は8.1. 項末尾の規則による。han-ōb ‘where is it?’ (ōbは8.8. 項を見よ) 等の存在を考えれば, han は GA・CPA の hān/’ān ‘where’である。-ukk の説明は困難であるが, シュピターラの説 (1938, § 112, 117) を基に次のように推定される: hān-hū-ḏukkā-dī ‘where is the place that~?’. MWA で dukkā-dī ‘the place where>where’から関係詞の l-への交替 (8.7. 項) により関係副詞的な ḏukk l- が生じていた事実は, この推測を支持すると思われる。’aža は, シリア地方のアラビア語方言で疑問を強める’agab ‘I wonder~?’ (古典語’agab-an ‘how strange!’)であり, マアルーラ地方で’why’の意味で用いられるこの語を借用したことは確実である。

何	誰	どれ	いかに	どこ	いつ	どれだけ	なぜ	疑問詞
mō	mōn	ēna	eh(t)	hanukk(i)	emmat	ehma	’aža	

8. 7. 関係詞 CPA dē と異なり GA に稀に残っていたdī>ti. ti の名詞の属格構造への使用が限定的なものとなり, 前置詞 l-‘to, for’の用法が一般的となったため, この用法からの類推で l-も関係詞的機能を持つ: ebra ti š-maytyō-lu = ebr(-i) l-š-maytyō-lu ‘the son whom you(f.) will bring (him)’. 後者での先行詞の -aの脱落及び属格構造一般については, 8.9. 項を見よ。[前例中で š-maytyō-lu = \*š-maytyā-le, 即ち強勢による長母音化した á>á>ō, 接続法を除く動詞活用形式 2.sg.f. に接尾する目的語としての接尾形 3.sg.m の -e>-u に注意]

mid-<\*mā-d- ‘that which, what’では dē-が残ると共に強勢位置の関係で mā>mi。

8. 8. コプラ CPA はコプラとして 3 人称代名詞独立形, ’it+人称代名詞独立形 (の前接形, 2.2.6項を見よ, GA は接尾形?) の他に, y(h)ib ‘given>exist’が時折用いられる点で特徴的であ

るが、MWA はコプラの発達の結果「AはBである」の表現は次のように非常に複雑である。

a) 述語が名詞・副詞句の場合コプラは一般に介在しない：ana bisnīta ‘I am a girl’。コプラが存在することもある：ana ʕi nōb ǧabrōna ‘I am not a man’。時は主節又は文脈が決定するが、特に指定する時後述のコプラ過去形が現われる：hann wayban ‘inbō ‘these were grapes’。

b) 述語が形容詞の時、それに動詞活用形式Y (8.12. 項を見よ) の人称接頭辞を加える：hačči, alō, ʕ-rabb(i) ‘God, you are great’。特に過去を示す時はコプラ過去形を併用する：nwibin n-ḥafn-in (バファア方言、マアルーラではwnibin) ‘we were hungry’。

c) 述語が名詞+形容詞の時、名詞が限定ならば形容詞も限定(*det. st.*)される。しかし名詞が不定ならば形容詞はb)と同様人称接頭辞を取る：ana ǧabrōna n-ifqer ‘I am a poor man’。複雑に見えるが、この形容詞は叙述的に用いられているので文法的には関係節を構成している：‘I am a man who am poor’。

d) 強い疑問・希望・意志を表わす文や従属節の中では、コプラの接続法が用いられる：hačči mō batt-aḥ ʕib ‘what are you, I wonder’

以上のように用いられるコプラは、次の形式を持っている。

	sg.						pl.					
	3		2		1		3		2		1	
	m.	f.	m.	f.	m.	f.	m.	f.	m.	f.	m.	f.
現在	ōb	ayba	čōb	šība	nōb	nība	aybin	ayban	čībin	?	nībin	?
接続法	yīb	čīb	čīb	čīb	?	?	yībun	?	čībun	čīban	?	?
過去	w+現在形(w-ōb etc.)											

コプラ活用表

現在と過去の関係は前述の通り文脈が決定するので、過去形の機能は二次的である。過去形は全人称が lā により否定されるが、現在形・接続法では3人が čūb, 2・1人称が čū により否定される。

	肯定		否定	活用形式
	現在	過去	現在 / 過去	
～がある	ōt(hāwē + 'īt)	wōt(hāwā + 'īt)	čūt (čū + 'īt)	無変化
～にある	upp-		čupp-(čūt + b-)	+ 人称代名詞接尾形
～を持つ	īl-('īt + l-)		čūl-(čū + īl-)	+ 人称代名詞接尾形

擬似コプラ諸形式

現在形は $\sqrt{y-h-b}$  'to give' の *p.p.*  $y(h)ib$  に  $\sqrt{h-w-y}$  'to be' の *a.p.* が加わったもの ( $h\bar{a}w\bar{e} + y(h)ib > *h\bar{a}wib > *o\bar{w}ib > o\bar{b}$ ) であり、過去形は後者の完了形  $h\bar{a}w\bar{a}$  がついたもの ( $h\bar{a}w\bar{a} + y(h)ib > *w\bar{a}yib > *w\bar{o}yib > w\bar{o}b$ ) である。接続法は、 $y(h)ib$  に接続法活用接辞 (活用形式 Z, 8.12. 項) が付加されたものであり、その構成原理の異常さは二次的形成を証明している。

コブラに関係するその他の表現形式は上表の通り。時には同じ。

8. 9. 名詞 後期アラム語の位相は消失し、*det.st.* の一般化により新体系が生まれた。不定は  $ah\bar{h}ab$  'one' 又は  $mett$  'something' (GA \**midde*) の前置、限定は近指示代名詞 (8.5. 項を見よ) により示される:  $mett bisn\bar{t}a$  'a girl';  $hob(<h\bar{o}di)-bisn\bar{t}a$  'the girl'。後者は定冠詞に近い機能を持つに至ったので、不定は一般にその欠如により示される。従って、 $ah\bar{h}ad$ ,  $mett$  の頻度は低い。古い *cst.st.* は消失し若干の名残りは不変化詞又は複合語構成要素となった:  $uh\bar{h}ul(<kol) y\bar{o}ma$  'every day',  $b\bar{e}(<b\bar{e}t) h\bar{o}l-i$  'the house of my uncle'。属格構造に関係詞  $ti(<d\bar{e}/d\bar{i})$  はあまり用いられず  $il-<l-$  'to, for' が主に用いられる。この時 *det.st.* の語尾 *-a* は脱落する:  $\bar{g}anna ti berk\bar{t}a/\bar{g}ann il-berk\bar{t}a$  'the garden of St. Thekla'。従って *-a* の脱落と  $il-$  の接頭により、新しい *cst.st.* と属格の形式が誕生したことになる。この形式は  $\bar{g}ann-e(<\bar{g}ann-eh$  'his garden')  $l-berk\bar{t}a$  に由来し、MEA で言及した属格構造(3)の関係詞  $d-$  が  $l-$  に交替したものである。つまり  $-i-$  は  $-eh$  'his' に遡るので、当然 *det.st.* の *-a* が脱落する。MCA にも属格構造(3)の痕跡が残っており、隣接する現代アラム語の共通した現象として興味深い。 $ebr\bar{a}$  'son' の新 *cst.st.* のみに見られる奇妙な  $ebr sult\bar{o}na$  'Sultan's son' は、アラビア語属格表現の模倣である。

古い *abs.st.* も消失したが、数詞と  $\bar{e}na$  'which' の後には新 *abs.st.* が用いられる:  $\bar{t}m\bar{o}nya y\bar{u}m-i$  'eight days'。この語尾は後期アラム語の *abs.st.pl.* に由来する ( $m. -i/\phi < -in$ ,  $f. -an < -\bar{a}n$ ) が、複数語尾  $-y\bar{o}ta$  を取る語彙に  $-y-$  が現われるのを除き、常に単数語幹 ( $m. -a$ ,  $f. -\check{c}a/\bar{t}a$  を脱落させた形) に接尾されるので、形成原理は後期アラム語と異なる:  $ebr-i < ebr\bar{a}$  'son(sg.)/ $bn\bar{o}$ (pl.)。ゆえに新 *abs.st.* と称する。

複数形は、女性名詞の場合後期アラム語の形式を保つが、男性名詞はそうでない。アラム語の  $m. pl. det.st.$  は一般に  $-ay(pl. cst. st.) + -\bar{a}(det. st.) > ayy\bar{a}$  であった。MWA では人称代名詞接尾形 B を接尾する複数名詞の語尾  $-o\bar{y}/ay$  (前述) のうち  $-o\bar{y}$  が新しい *cst.st.* となり、これに *det.st.* の  $-\bar{a}$  を接尾させた。この後強勢規則により  $-o\bar{y}a > -o\bar{y} > -\bar{o}$ 。  $-ayy\bar{a} > *-\bar{a}-ya > -o\bar{y}a$  はあり得ない。以上より MWA の新しい位相体系は次のようになる。

	sg.		新 abs.st.	pl.	
	det.st.	新 cst.st.		det.st.	新 cst.st.
m.	-a	- $\phi$	-i/ $\phi$	- $\bar{o}ya/o\bar{y}/\bar{o}$	- $\bar{o}y$
f.	-\check{c}a/ $\bar{t}a$	-\check{c}/ $\bar{t}$	-an	-\bar{o}\bar{t}a	-\bar{o}\bar{t}

名詞位相体系



8. 10. 形容詞 MEA と MCA は複数形での性の区別を失ったため形容詞では男性複数語尾が一般化した。MWA では名詞複数での性区別の保存に対応して、複数の性区別が示される。他方名詞の *det.st.* 語尾の一般化に対して、形容詞は位相 *det.st./abs.st.* の区別を保存するため、限定性（限定 / 不定）も表示する。しかしこの結果、名詞と形容詞の位相体系は異ったものとなり、古いアラム語のように両者がほぼ常に同一語尾形式をとる、ということは無くなった。

	sg.		pl.	
	det.st.	abs.st.	det.st.	abs.st.
m	-a	- $\phi$	- $\bar{o}$	-in
f	-ča/ta	-a/i/ $\phi$	- $\bar{o}$ ta	-an

形容詞位相体系

複数の *abs.st.* は名詞の新 *abs.st.* と同じく後期アラム語のそれに由来するが、男性形で n が脱落しないことに注意。又女性単数 *abs.st.* -a は、強勢による音形の相違 (*m. iz'ur- $\phi$* , *f. z'ör-a*) のため性区別で、-č/ta の欠如により限定性（＝位相）でそれぞれ余剰となり、-a > i >  $\phi$  となる。名詞男性複数 *det.st.* と同じ現象である。

限定的用法で後置される形容詞は、性・数・位相により変化する：*ḥmör-a iz'ur- $\phi$*  (*m. sg. abs.st.*) ‘a small ass’, *beṣl-a z'ör-a* (*m. sg. det.st.*) ‘the small onion’, *w'ay-ōta kayyis-an* (*f. pl. abs. st.*) ‘good things’。 *f. pl. det.st.* の例は発見されない。名詞が階定されると関係節で叙述的に表現されることが多いからである。叙述的用法の形容詞は、常に *abs.st.* が用いられ性と数で変化し、更に動詞活用形式 Y（8.12. 項を見よ）の接頭辞が加えられる。例はコブラの項（8.8.）を見よ。

8. 11. 動詞のアスペクト組織 新旧形式の共存、アラビア語動詞組織の一部借用、 $\sqrt{h-w-y}$  ‘to be’ を用いた時制表現欠如に帰因するアスペクトの発達等のため、MWA の動詞組織は複雑化した。アスペクト組織を暫定的に次のようにまとめる。以下には、パラダイムの一貫性のため、テキストに在証されない形式も一部使用する。尚 X, Y, Z は各活用形式のタイプを示す。

	アスペクト				法	
	完了相	未完了相	進行相	結果相	接続法	命令法
行為動詞 (to buy)	i zban-X	Y-zōben ‘amma Y-zōben		Y-i zben	Z-zbun	i zbun/zbōn
状態動詞 (to be ashamed)	i bheč-X			Y-bahhec	Z-bhač	i bhač/bhāč

動詞アスペクト組織

後期アラム語の行為 / 状態の対立は基本的に保持され、完了相と法（古い未完了形）における語幹母音の区別として現われる：行為動詞 a-u, 状態動詞 e-a。後期アラム語の未完了形は能動分詞により交替されたが、他の現代アラム語と異なり古い未完了形は接続法（意志・疑念・要求等を表わす）として残った。能動分詞（コレルの *das erste Partizip*) *zōben* < *zābēn* は未完了相を担うとともに、アラビア語方言の進行相表示詞 ‘*ammal*’ (‘*amma*, ‘*am*, ‘*a*) を借用して進行相も表現する。他方受動分詞 *izben* < *zēbīn* は、古いアラム語で、完了した状態を示す機能より二次的に発生した能動的状态をも表示する用法に基づき、MEA と同様に結果相を生み出した（シュピターラの *Plusquamperfekt*, コレルの *das Resultativpartizip*)。MEA との平行性は注目に価する。状態動詞は本来受動分詞を持たないので、その結果相は古い動詞形容詞 *qattil* > *qāttel* を用いる（シュピターラとコレルの *das zweite Partizip*)。尚、この形式については MCA の状態動詞完了相（4.10. 項）と比較せよ。結果分詞 *izben* と第2能動分詞 *bahheč* の相補的關係を認識したのはコレルの功績である。従ってシュピターラの術語は不正確であり用いるべきでない。空間移動の動詞（往来・昇降等）は、状態動詞に属さないが受動分詞を持たないので、結果相は状態動詞の形式を取る。「終点に到達した結果」=「行為の結果」を示すとともに、「起点から離脱した結果」=「行為の進行中」という点で、結果相にもかかわらず行為動詞の進行相にも接近する：*φ-nahheč* ‘he has come down/he is coming(going) down’。

これらのアスペクトは、発話時点又は文脈中の基準点における話者の認識であるから、時制に対しては相対的価値しか持たず、現在 / 未来と過去のいずれの文脈にも用いられる。他の現代アラム語がアスペクトの枠組の中に  $\sqrt{h-w-y}$  ‘to be’ の形式を組み込み時制表現を可能にしたり、古い完了形が過去に接近したりしているのに比べ、MWA はセム語のアスペクトの特徴を強く残している。

**8. 12. 活用形式の種類** 完了相の X は古い完了形の接尾辞活用に、接続法の Z は未完了形の接頭辞活用（一部は接尾辞も）に由来する。今 GA との対応表を掲げる。

MWA の X で 2・1 人称複数は、単数形 *-iç*, *-it* に対応する人称代名詞接尾形 *-hun*, *-hen*, *-nah* を接尾させたもの。3 人称複数 *-φ* は CPA でも CS の「影響」として散見されるが、それが現代語にまで残るとは信じがたいほどである。Z の 1 人称単数 *n-* は GA・CPA において始まった複数形との混同の結果である。活用形式 Y は本来分詞又は動詞形容詞から生じた活用形式であるから、形容詞の叙述的用法で述べた形式と同一である。即ち、性と数は形容詞の *abs.st.* の語尾により、人称は接頭辞により示される。

この人称接頭辞は 3 人称を除き、接続法の活用形式 Z の接頭辞子音と一致するが、発生的には関係なく本来分詞の前に主語として置かれた人称代名詞独立形である。即ち、後期西アラム語では後期東アラム語と異なり、分詞は代名詞主語を前置したことに由来する：*\*att zābēn* > *\*att-zōben* > *\*t-zōben* > *ç-zōben* ‘you buy’。又本来分詞であるから、普通名詞の主語が多い 3 人称に、代名詞主語の先行は必要でない。ゆえに 3 人称接頭辞は *φ* である。

		sg.					pl.				
		3		2		1	3		2		1
		m.	f.	m.	f.	m/f	m.	f.	m.	f.	m/f
X	MWA	izban- $\phi$	zabn-a $\underline{t}$	-i $\check{c}$	-i $\check{s}$	-i $\underline{t}$	izban- $\phi$	zabn-i $\check{c}$ hun	-i $\check{c}$ hen	-inna $\check{h}$	
	GA	- $\phi$	-a $\underline{t}$	-t	-?	-e $\underline{t}$	- $\bar{u}$ (n)	- $\bar{e}$ n	-t $\bar{o}$ / $\bar{u}$ n	-?	-nan
Z	MWA	yi-zbun	$\check{c}$ i-	$\check{c}$ i-	$\check{s}$ i-	ni-	y-zubn-un	y-an	$\check{c}$ — un	$\check{c}$ — an	ni-zbun- $\phi$
	GA	ye-	te-	te-	*te-i $\bar{n}$	*e/ne-	ye — $\bar{u}$ n	ye- $\bar{a}$ n	te — $\bar{u}$ n	*te- $\bar{a}$ n	ne — $\phi$

活用形式 X・Z

	sg.		pl.	
	m.	f.	m.	f.
3	$\phi$ - $\phi$	$\phi$ -a	$\phi$ -i $\bar{n}$	$\phi$ -a $\bar{n}$
2	$\check{c}$ - $\phi$	$\check{s}$ -a	$\check{c}$ -i $\bar{n}$	$\check{c}$ -a $\bar{n}$
1	n- $\phi$	n-a	n-i $\bar{n}$	n-a $\bar{n}$

活用形式 Y

尚、命令法の活用語尾は単数で - $\phi$ 、複数で -un/ $\bar{o}$ n(m.), -en/ $\bar{e}$ n(f.)である。

いずれにしても、これらの人称接頭辞による活用形式 Y は、MEA 未完了相の活用形式 A (接尾)に発生的に対応する(2.2.2. 項及び2.4.7. 項参照)が、表面的に接続法の Z に酷似しているので注意が必要である。古い活用形式 X, Z と新しい Y の共存は、あらゆる意味で MEA と対立する。人称目的語は、X・Z には接尾され(8.3. 項冒頭部を見よ)、Y では前置詞 l- 'to, for'により示される。X・Z の否定は la, Y は形容詞と同じく  $\check{c}$ u により表わされる。Y は、特に相対的過去を明示したい時、形容詞の叙述的用法の場合と同様にコプラの過去形を前置するが、時制の未発達のため例はきわめて少ない: w-ayb-a (コプラ・過去, 3 sg. f.) ḥaml-ta  $\phi$ -sallīq-a (空間移動の動詞・結果相, 3 sg. f.) 'a patrol had just come up'。

8. 13. 動詞の派生型 後期アラム語の再帰型が失われた結果、次の組織を持つ。

	完了相	未完了・進行相	結果相	接続法	命令法	不定詞	p.p.	意味
Peal	izban- $\phi$ zban	zōben	izben/bahhec	yizbun	izbun/zbōn	zbōna	izben	to buy
Pael	zappen	mzappen	zappen	yzappen	zappen	zuppōna	mzappan	to sell
Aphel	aḥšem	maḥšem	aḥšem	yaḥšem	aḥšem	muḥšōm- $\check{c}$ a	——	to take supper
GAの対応形式	完了形	a.p.	p.p./ 動詞形容詞	未完了形	命令法	n.ac.	p.p.	

動詞派生型組織

Peal の結果相 *izben* < \**zēbīn* (*p.p.*), *bahheč* < \**bahhič* (動詞形容詞) の影響で, Pael と Aphel の結果相が新たに生まれた: *zappen* < \**zappīn*, *aḥsem* < \**aḥšīm*。他のアラム語に類例のないこの形式は, 結果相が独立したカテゴリーであることを示す有力な証拠である。不定詞は完全に二次的である。Pealは他の現代アラム語と同様に *n.ac.* の *qṭālā*, Pael は MCA と同様に *n.ac.* の *quttālā* に由来する。Aphel のみ GA ・ CPA の不定詞の *m-* を保持するが, 母音は Pael に影響されているし, GA のように女性語尾 *-ča* < \**-ta* を持つ。

アラビア語の派生型が多く借用されていることは注目すべきであるが, アラム語の音韻変化と活用形式を採ることにより, 完全にアラム語化している。借用された派生型は, II 型=Pael, IV 型=Aphel はもちろんのこと, X 型を除くすべてを含んでいる。

尚, *p.p.* は頻度も低く, Aphel には存在しない。一般に受身表現が少ないこと, アラビア語派生型 VII (再帰・受身) (i)n-*qaṭal* がアラム語語根にも用いられることなどによる: *in-zban* 'it has been bought'。ただし Peal の結果相において, 論理的目的語が文法的主語と認識されて, 受身表現を作るが, これは受身相とでも言うべき結果相の下位変種である: *mō φ-iḥteb-φ b-ōw-warqta* 'what is written in the letter?'。